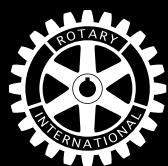


純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part XI



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

目 次

1. 『再びニコニコ箱について』 その1	2
2. 『再びニコニコ箱について一言』 その2	3
3. 『再びニコニコ箱について一言』 その3	4
4. 『リーダーとリーダーシップ』	5
5. 『品格のあるスマートなクラブ』 その1	6
6. 『品格のあるスマートなクラブ』 その2	7
7. 『品格のあるスマートなクラブ』 その3	8
8. 『品格のあるスマートなクラブ』 その4 ～高明満座～	9
9. 『品格のあるスマートなクラブ』 その5	10
10. 『品格のあるスマートなクラブ』 その6 ～韋駄天の心～	11
11. 『品格のあるスマートなクラブ』 その7 ～韋駄天の心～	12
12. 『決議23-34号の存在意義』 その1	13
13. 『決議23-34号の存在意義』 その2	14
14. 『露口四郎』 その1～クラブ幹事歴任13年～	15
15. 『露口四郎』 その2～大阪クラブ創立～	16
16. 『露口四郎』 その3～大阪クラブ創立～	17
17. 『戦前の日本ロータリーの特徴』 その1	18
18. 『戦前の日本ロータリーの特徴』 その2	19
19. 『ロータリークラブの発祥』 その1	20
20. 『ロータリークラブの発祥』 その2	21
21. 『ロータリークラブの発祥』 その3	22
22. 『ロータリークラブの発祥』 その4	23
23. 『ロータリークラブの発祥』 その5	24
24. 『ロータリークラブの発祥』 その6	25
25. 『ロータリークラブの発祥』 その7	26
26. 『ロータリークラブの発祥』 その8	27
27. 『ロータリークラブの発祥』 その9	28
28. 『ロータリークラブの発祥』 その10	29
29. 『ロータリークラブの発祥』 その11	30
30. 『ロータリークラブの発祥』 その12	31
31. 『ロータリークラブの発祥』 その13	32
32. 「ロータリーあれこれ 大いなる春といふもの来るべし 高野素十」	
伊丹 RC 卓話	33
33. 「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」伊丹 RC	38

序にかえて

竹中秀夫会員の発案で始まりました3分間情報『純ちゃんのコーナー』は、既に満10年の歳月を閲することになりました。

最近のR Iの動向は、バーナード・ショーではありませんが、将に「ロータリーよ、何処へ行く」の感がありますが、これは全て目に見えている現象の世界の出来事であります。現象の世界は、時代の変遷に応じて日々新たに日にまた新たに变化して行きます。したがって、人の心もまた移ろいます。しかし、大事なことは世の中の目に映る現象の世界が如何に変わろうとも、世の中は本来如何にあるべきか、人間は本来如何に生きるべきか、という本質の問題を忘れてはならないと同様に、ロータリーは本来如何にあるべきか、という本質の問題を忘れてはならないと思うのであります。したがって、私達は、常に現象に惑わされることなく、物事の本質を見抜かなければなりません。

ロータリーは、創立以来、常に物事の本質を見抜いてきた思想であります。だからこそ、20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動であると謂われているのであります。それなるが故に、ロータリーは、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと謂うものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであり、将にこれは先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。したがって、先輩達に敬意を表して、その知恵に学ばなければならないと思うのであります。

そして、知恵に学ぶ、ということは、単に知識として知っているだけでは駄目でありまして、ロータリーの中で色々な体験を積み重ねることによって、初めてロータリーが身に付いていくものなのであります。したがって、私達は、単に知識を学ぶだけでなく、例会を始めあらゆる会合を通じて良質な職業人にお目にかかり、その一挙手一投足からながしかのものを学ぶという体験を積むことが大切であります。これが、社会奉仕、職業奉仕そして国際奉仕の実践の基本前提であろうかと思うのであります。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を31回に亘って話しました。しかし、年間の卓話数に比べると若干少ないように思いますので、今回はそれに加えて、私の今年の3月29日の伊丹クラブ卓話「ロータリーあれこれ～大いなる春といふもの來たるべし 高野素十～」と私の寸感「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この一年間、飽きもせず私の話を聴いて下さったクラブの皆様方の友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレットの発刊に御尽力賜りました杉本啓次会員はじめクラブ事務局の皆様にも心からなる感謝を捧げペンを擱きます。

深 川 純 一

1. 『再びニコニコ箱について』 その1

ニコニコ箱については、既に2001年度から始まった純ちゃんのコーナー第1巻第21講と第22講においてその概要を紹介致しましたが、その後、新しい会員も増えてその原理的な意味をご存じない方もおられると思いますので、今日は簡単にそのエクスだけを話しておきます。

まず、ニコニコ箱と謂うものは、世界中どここの国にもあるというものではないのであります。即ち、世界的な慣例ではありません。

日本でニコニコ箱の慣例が出来たのは、1923年の関東大震災の被災孤児達を東京ロータリーホームという孤児院で世話をしていましたが、12年後の1935年即ち、昭和10年、東京ロータリークラブの人達が当時オープンした多摩川園という遊園地に孤児達をつれて行ってやろうということになりました。

ところが、その資金は何処にあるのか。ロータリークラブは営利団体ではありませんから、クラブの必要経費の総額を会員の頭数で割って会員が均分に負担するものであり、クラブの経費以外に余分な金は一銭もありません。即ち、クラブの会員個人はお金持であります、クラブ自体には金はないのであります。

そこで、日本橋の羅紗問屋上村伝助商店の筆頭番頭であった関幸重という人が一計を案じまして、あり合わせのボール紙の箱をもって、『明日はあなたの誕生日ですよ』とか『昨日お嬢さんが結婚されたでしょう』とか言って、色々なことを軽妙洒脱に面白く話しながら例会場を回ったのであります。そこで会員達が皆笑いながら財布の紐

を解いて幾ばくかの金を寄付しました。これが日本におけるニコニコ箱の始まりであります。

当時、大学卒の初任給が60円くらいの時代に600円の金が集まったと謂いますから、流石は東京ロータリークラブであります。この金で被災孤児達を多摩川園に連れて行くことが出来たのであります。

それから以後は、関さんが何かことあるごとにその箱を持って回ったのであります、皆がニコニコして金を出してくれるのに、ボール紙の汚い箱では具合が悪かろうと謂うので、三越に注文して「えびす様」の顔を彫った箱を誂えました。これがニコニコ箱の起こりであります。いずれにしても、戦前のロータリアン達は、金を集めるにしても色々考えてユーモラスにやったのであります。ただ現在のロータリーには、このユーモアがやや乏しいように思うのであります。曾て西宮クラブから出た今田恵ガバナーは、ロータリアンはユーモアを解すべし、と説かれたことも心に留めて置くべきであろうかと思ひます。

このニコニコ箱は、戦時中、軍閥の弾圧によって日本のロータリーが壊滅した時に、後難を恐れて他の書類と共に廃棄されたと謂われていましたが、今から約20年ほど前に東京クラブに無事保存されていることが判りました。また、関東大震災を契機として東京クラブの奉仕活動が社会奉仕に大きく傾斜していったこと、その副産物としてニコニコ箱の慣例が生まれたことなど考えますと、今年の東北大震災に際しても先輩の智慧に学ぶべきことも多々あるかと思ひます。

2. 『再びニコニコ箱について一言』 その2

前回申し上げたように、ニコニコ箱というものは、クラブの会員に何か嬉しい事があったときに、それを記念して社会奉仕のためにながしかの浄財を入れるものがありますから、クラブにとっては会員からの預かり金であります。即ち、原理的に謂えば、会員からクラブに対する一つの信託財産であって、クラブの金ではないのであります。この金は、クラブの会員がこの善き因縁のお金で社会奉仕をして下さいよ、という形で、予めクラブ理事会に預けておくお金でありますから、これはあくまでも会員の預託金であってクラブ自身の金ではないのであります。したがって、例えば、クラブの通常会計が赤字になった場合、この金をクラブの赤字補填に使うことは出来ない所以であります。もし、クラブがこの金を赤字補填に使えば、会員が社会奉仕のためにクラブに預けた金をクラブが横領したことになるからであります。このような恥ずかしいことは絶対にしてはならないのであります。したがって、クラブの通常会計が赤字になった場合は、クラブの会費を値上げするほかありません。

元来、ニコニコ箱は、クラブの会員が何か嬉しい事があったことを記念して出す金でありますから、何時入って来るか判らない、いわば不時の収入であります。したがって、予め予算を立てることが出来ません。

したがって、予算に基づいて事業計画を立てるといっても出来ない所以であります。

したがって、ニコニコ箱の金は、当該会計年度に使うことは出来ません。

では、ニコニコ箱の管理はどのようにするのかと言いますと、その年度の6月30

日で、そのメた金を次の年度の社会奉仕の事業予算科目に載せるのであります。

そして、次年度に使ってしまうのであります。このように、ニコニコ箱財源の支出方法だけは、会計年度が1年遅れになってくるのであります。

もし、当該会計年度に使うものとして予算を立てますと、5月頃になってニコニコ財源が予算額に満たなくなると、『今年度の予算額には未だ大分不足していますので皆さん御協力を御願います』と言って、例会で各テーブルにニコニコ箱を回すようなこととなります。これは会員に義務なき出費を強制することになり、ロータリーの原理に反することになります。このような恥ずべきことは絶対に慎むべきであり、いささかなりとも強制にわたることがあってはならないのであります。

第一、ニコニコ箱財源は、会員の善意で集まった金をもって社会奉仕に役立てるものがありますから、予めいくら集めなければならぬという予算などを立てること自体、全くナンセンスなのであります。クラブとしては、その年度に集まった不時の収入金をどのような社会奉仕に使うべきかを考えればよいのであります。

このように、ニコニコ箱は、原理的には寄付金ありますから、『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』ものなのであります。そして『出した人必ずしも尊からず、出さざる人必ずしも卑しからず』というのが寄付金の原則であります。

したがって、強制的要素の一切ないものをニコニコ箱というのであります。

3. 『再びニコニコ箱について一言』 その3

前回は、ニコニコ箱は寄付金でありますから、『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』ものなのであり、『出した人必ずしも尊からず、出さざる人必ずしも卑しからず』というのが基本原則であり、強制的要素の一切ないものがニコニコ箱であると申しました。

ところで、東京ロータリークラブのこのニコニコ箱の慣例に対して、大阪ロータリークラブでは、既に昭和5年にニコニコ箱の慣例があったという説があります。

しかし、大阪クラブの慣例は、その実体は『罰金箱』でありまして、ニコニコ箱とは原理的にその性格が全く異なるのであります。罰金箱というものは、会員が例会に遅刻したときなどにS A Aが50銭乃至1円を取り立てたものでありまして、昭和5年当時、61円50銭が集まったという記録があります。

このように、大阪クラブの慣例は、ニコニコ箱とはその原理的性格が異なるのであります。ニコニコ箱は、あくまでも会員に何か喜び事があったときにそれを記念して、社会奉仕のために心ばかりのお金をクラブに預けるものでありまして、罰金箱のように人を責める形で金を集めるものではありません。罰金という恨み辛みの籠もった金を社会奉仕に使うなどということは、心を大切にするロータリーの趣旨に合わないのであります。したがって、当クラブでは、私の会長年度から、ニコニコ箱とは別に罰金箱の制度を設けて、これを『すまんボックス』と名付けたのであります。

このように当クラブの『すまんボックス』は、罰金箱でありますから、クラブの赤字

補填に使うことも出来るのであり、その他にも貯まった罰金をクラブ会員の親睦のために使うことも出来るのであります。何故なら、罰金箱は、原理的には、恨み辛みの籠もった金でありますから、このような金は、本来、社会奉仕に使うべきではないからであります。このように、ニコニコ箱と罰金箱とは原理的に区別して取り扱わなければなりません。これを混同するとロータリーが衰退するのであります。

要するに、ニコニコ箱の収入支出は、寄付金の原則によりますから、強制力はありません。『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』『出した人必ずしも尊からず、出さない人必ずしも卑しからず』という原則に服することになるのであります。詰まり『出してよく、出さないでよいニコニコ箱』であります。したがって、これは浄財でありますから社会奉仕にだけ使うべきであります。しかも、これは不時の収入でありますから、予め予算を立てることは出来ないのであります。

これに対して、罰金箱は、徴収のルールを理事会で決めれば、これは一つの契約でありますから強制力があります。会員の意に反しても強制的に取り立てることが出来ます。そして、これも不時の収入でありますから予算化は出来ません。しかし、これは、罰金でありますから、原理的には恨み辛みのこもった金であります。したがって、クラブ財源の赤字補填に使うことも、その他クラブや会員のために自由に使うことが出来るのであります。

4. 『リーダーとリーダーシップ』

今の世の中には、国家をはじめ地方自治体、会社、病院その他公私に亘って色々な組織があります。したがって、組織の長たる立場にあるリーダーも色々様々であります。これは将に現象の世界であります。

中には、リーダーとして欠くべからざる適格即ち、リーダーシップの本質を辨えないリーダーもいます。リーダーにリーダーシップがないと組織が減びます。リーダーは目に見えますが、リーダーシップは目に見えません。これは、体験によって身に付くもの、授かるものであります。世の中の色々な人と出会い、話を聞き、その人達の一挙手一投足から授かり、学びとるのであります。そして、学んだことは実践して初めて身に付くものなのであります。

ロータリーは例会に出れば解る、というのはこのことなのであります。

そこで、真のリーダーシップの一例として一つの物語を紹介しておきます。

江戸時代の寛保年間、京都に山下京右衛門というかなり名の知られた俳優がいました。ある時、当時売り出し中の女形沢村四郎五郎を相手役として演じたところ、京右衛門の評判は圧倒的に高かったのですが、四郎五郎の方は人気がありませんでした。

ところが、その芝居を当時、一代の名優といわれた二代目坂田籐十郎が見物に来たので、京右衛門は敬意を表して挨拶に出て、「未熟者故、どうか御批判を…」と頼みました。すると、籐十郎は、「全く下手だね」と言ったきり、帰ってしまいました。京右衛門はムッとしましたが、相手が名優なので、思い直して、演技に一層の工夫を凝らしましたので観客の受けは益々よくなる一

方でありました。

そこで、京右衛門は、もう大丈夫だろうと思って、辞を低くして頼んで観て貰ったところ、籐十郎はやはり「何度観てもお前さんは下手だよ」とにべもなく言いました。

京右衛門は怒りを抑えましたが胸の中は納まりません。その晩、籐十郎の家に出かけて行って、「自分としては精一杯で、これ以上の工夫の凝らしようがありませんが…」と頭を下げて尋ねました。すると籐十郎は、「お前さんの芸は、どうにか出来ているが苟も一座の頭となれば、出来るだけ相手役なり、下の役者を引き立てて、一人で場をさらってしまうような仕草は慎まなければならない。お前さんの相手役の四郎五郎は、今売り出しの若手なのに、お前さんが先へ先へと出るので彼は手の出しようがない。観客の拍手喝采は、お前さんに集まっているが、それは真の拍手喝采ではない。お前さんが自分を抑えて、相手役や若手の芸を引き立たせながら、観客の拍手喝采を浴びたならそれこそ本物ののだ。お前さんを下手だと言ったのはその心組みを言ったわけだ」と答えたのであります。

今の世の中のリーダーに欠けているのはこの点であります。自分だけが輝いていたというリーダーが多過ぎます。自分のことはさておいて先ず世のため人のためのことを思うのがロータリアンであります。このことは芸の世界に限らず、企業でも政界、官界そしてロータリーでも全く同じことが言えます。したがって、リーダーにリーダーシップがない組織は、やがて亡ぶことになるのであります。

5. 『品格のあるスマートなクラブ』 その1

竹中会長は、今年の第1例会の会長挨拶の劈頭、品格のあるスマートなクラブを目指したい、ということをお説かれました。この言葉を聞いてすぐ思ひだした言葉は、昔、日本海軍の士官の心得として説かれた3Sという言葉でありました。3Sというのは、Smart, Speed, Smileの略語であります。

ところで、スマートなクラブを作り上げるには、先ず会員1人1人がスマートでなければなりません。では、スマートとは具体的にどのようなことなのか。それは、会員の身なりや態度・行動が洗練されて粹なことであります。それには先ず、会員の身も心も洗練されなければスマートなロータリーになることは出来ません。

では、具体的には一体どうすればよいのか。一つの物語を紹介しておきます。

1936年、イタリア国立聯合病院のエンリコ・ジュッポーニ博士が「鏡の前の外科医」という一種の「想ひ出の記」とでもいふべき名著を發刊しました。この本の題名は、その一節の「鏡～言葉なき批判者」という文章が極めて印象的であり、感激を覚えるものなので命名されたいのであります。

さて、どこの病院でも、手術室に入る前に消毒室があります。その消毒室の壁には、大きな鏡が取り付けられています。外科医は、手術室に入る前、ここで手洗いをし、手の消毒をします。そして、鏡の前に立って、鏡の中の自分の目に問ひかけるのであります。今から行おうとする手術は、人の道に反してはいないか、良心に悖るところはないか、自分の全能力を發揮できるか、を確かめて後、静かに手術室に入ります。

そして、手術が終わり最後の縫合が行われると、元の消毒室に戻り、手術衣と手袋を脱ぎ、マスクをはずしてから、また鏡の前に立ちます。そして、今行ってきた手術の批判を鏡の中の自分の目に見るのであります。鏡の中の目から、手術は正しく行われたか、全力を發揮できたか、全て良心に従って行われたかと反省するのであります。

エンリコ・ジュッポーニ博士は、ここで次の言葉を書き加えています。即ち、「鏡は一瞬にして全てを表す。鏡は冷たく、隠蔽することを知らない」と。

私は、この話の根底に、自己を厳しく見つめ、他者を優しく思いやる職業奉仕の心を見るのであります。そして、クラブの1人1人の会員が毎朝、厳しく自分を見詰めて一日の行動を始めることによって、初めて品格のあるスマートなクラブが出来上ると思うのであります。

自分の目を見詰めて、その奥に自分の心を観て自己研鑽の糧とし、自分の行動の一挙手一投足を洗練されたスマートなものとするのであります。そして、例会で他の会員の一挙手一投足から学んだことを自分の心に植え付けることによって、初めて人は育つのであります。これが自己研鑽であり、例会で仲間によって育てられるのが切磋琢磨であります。だからこそロータリーは、例会出席をやかましく言うのであります。

これがクラブ奉仕の基本であります。「ロータリーの例会は人生の道場である」と謂う米山先生の言葉の全ての意味がここにあるのであります。

6. 『品格のあるスマートなクラブ』 その2

前回は、竹中会長が今年度第1例会で提唱された品格のあるスマートなクラブについて、昔の海軍士官の心得としての3S即ち、スマート、スピード、スマイル Smart, Speed, Smile という言葉のうちのスマートということについて一言申し上げました。そこで、今日は3Sの中のスピードという言葉について話したいと思います。

実は、この3Sという言葉は、戦時中、元海軍航空隊の教官をしておられた海軍大尉の亀井宰さんから聞いた言葉であります。亀井さんは、私と酒を酌み交わしながら、曾て海軍士官として受けた躰が、今、実業家になっても大変役に立っていると述懐しておられました。即ち、海軍士官が自分の行動を規律するモットーとしてスピードということを重視しているのは、軍艦という複雑な閉鎖社会では仕事をスピーディに処理する能力が要求されるからだといふのであります。しかも拙速でなく、巧緻でなければなりません。そうでなければ、一旦緩急あるときに戦争に負けてしまいます。したがって、自分の行動の一挙手一投足がスマートにしてスピーディでなければなりません。そして、このことは軍艦に限らず一般社会においても、何事によらず仕事を処理する上で重要なことはスピーディでなければならないといふのであります。

では、これをロータリーについて謂えばどのようなことになるのか。

私は、クラブに入会後3年目の1976～77年度にクラブ幹事を務めました。その時のクラブ会長は名誉会員の松谷英次郎さんでありました。そして、会長と共に幹事エレクトとして地区協議会に出席しましたが、その年度の幹事部門のリーダーは、

神戸東クラブの末正久さんでありました。末正さんは、千種会でも勉強されたロータリーの理論家でありましたが、その末正さんが、地区協議会の幹事部門で説かれた言葉に、私が肝に銘じて忘れ得ぬ言葉が一つあります。

それは、「幹事は、手紙を受け取ったら24時間以内に必ず返事を出すべし」ということであります。手紙を貰った相手に直ちに返事を出す、そのことが将に相手に対する思いやりであり、同時に自分の信用を高めることになるといふのであります。

幹事は、クラブ内外の情報を一身にプールしていますから、あらゆる情報は全て幹事を経由することになっています。したがって、幹事は、クラブ管理の全ての実権を握っているのですから、クラブの中の事務処理はスピーディでなければならないのであります。

そして、このことは、何も幹事だけに限ったことではありません。社会の管理者であるロータリアン全てに当て嵌まることであります。現に私の体験で謂えば、多くのパストガバナーや指導的立場にあるロータリアンに手紙を出しますと、返りが返ってくるように直ちに返事が来ます。そのことがロータリーに所謂良質なロータリアンであることの証なのであります。極稀に返事の返ってこないロータリアンもいますが、その人は、そのことによってロータリアンとしての信用を失うことになるのであります。この意味では、ロータリーの世界は真に厳しいものであります。これが、将に、お互いが厳しく自己を見つめ合う精神的親睦の世界なのであります。

7. 『品格のあるスマートなクラブ』 その3

前回は、品格のあるスマートなクラブという竹中会長の提唱について、スマート、スピード、スマイル Smart,Speed,Smile という3Sの言葉の中のスマートについてお話し申し上げました。そこで、今日は、の最後のスマイルについてお話し致します。

さて、海軍士官が忙しい艦隊勤務の中で、常にスマイル・微笑みを忘れないという心得は、真にスマートな海軍士官らしい Motto だと思うのであります。

では、これをロータリーについて謂えばどのようなことになるのか。

私がスマイルという言葉聞いてロータリーについてすぐ思いだしたのは、日本のロータリーがまだ5地区しかなかった頃に西宮クラブから出た名ガバナー今田恵先生のことでありました。今田先生は、主としてアメリカで唱えられたプラグマティズムの心理学の大家であられまして、曾て私の母校関西学院の院長でもあられました。

先生の没後、西宮クラブが発行した追悼録『今田恵～人とそのロータリー思想～』（昭和57年発刊）に西宮クラブの元会員達が今田先生の思い出を語っておられますので、その二、三を紹介しておきます。

元会員の寺本清次郎さんは、「…私は、毎週例会に出席し、今田先生のにこやかなお顔を拝見するのが楽しみでございました。また、ある時期には、名ガバナーとして大変忙しくご活躍の日々を送っておりましたが、いつも、いわゆる「今田スマイル」を湛えられながら、どんな人ともにこやかに談笑せられておられた御姿が未だに私の臉に浮かんでまいります」

また、元会員の長部俊三さんは、「ロー

タリー・フェイスという言葉が許されるなら、今田先生をおいてほかにあるまいと思うのでございます。いつも変わらぬ笑顔、静かな口調で話しかけられる先生の温顔を私は忘れることは出来ません。しかも、先生のお話になることの全てが、「誠」であり、「善意」であり、ロータリーを愛する精神であったと思うのでございます」

また、当時の西宮クラブ会長八木弦三郎さんは、その追悼録の冒頭の挨拶において、「…先生の話になると、何か春風にも似たあたたかい雰囲気私達のまわりに漂い、つい先日の事のように思い出されるのです。先生のスピーチや講演は、御承知のように聞く者を魅了せずにはおかない独特の魅力がありました。ふだんは、どちらかといえば、にこやかで物静かな紳士のようにお見受けしました」と述べておられます。

クラブの人達から「今田スマイル」と崇められ、また、「ロータリー・フェイス」と讃えられた今田恵パストガバナーは、将に「和顔愛語」の人であったと思うのであります。

何はともあれ、スマイルは、ロータリーの核にある親睦の大切な要素であります。

「どこで会ってもやあとやおうよ」というロータリーソングのように、ロータリアン同志であれば、会えばすぐ、ごく自然に微笑みが生まれます。これがロータリアンの証しであり、「ロータリー・スマイル」とでも謂うべきものであります。

8. 『品格のあるスマートなクラブ』 その4 ～高明満座～

前回は、品格のあるスマートなクラブという竹中会長の提唱について、スマート、スピード、スマイルという三つの言葉の中の最後のスマイルについてお話し上げました。そこで今日は、クラブの品格について申し上げたいと思います。

実は、私が伊丹クラブに入会したのは、1973年、昭和48年3月であります。その年度のガバナーは、西宮甲子園クラブから出られた古河滋ガバナーでありました。そして、入会した月に頂いた3月30日発行のガバナー月信第10号の巻頭言の言葉は、私にとって終生忘れ得ぬものでありますので紹介しておきます。

古河ガバナーは、この巻頭言においてクラブの品格について説いておられました。

即ち、「ロータリーの集まりは、ただの友愛の場であってはならない。それは互いに高め合うための場であってほしい。決して堅いことばかり言う会ではなく、素朴で、ありのままに語り合える会、気楽なゆとりのある会でなければならぬが、香りの高い集まりでなければならぬ。

『歩々清風を起こす』 一步一步清々しい風を起こす、というが、それは平面的な集まりでなく、盛り上がる会でなければならぬ。生命力に充ちた集まりであってほしい。

『高明満座』 互いに高明と呼べる集まりであってほしい。

先ず我々自身を高めることである。いかに背伸びしても、我々が持たぬものは人に与えることは出来ない」というのであります。

更に、古河ガバナーは、その3ヶ月後の月信第13号において南禅寺派管長の柴山

全慶老師の扁額に見た『歩々起清風』という五文字に触れて、「これは、我々の日々の歩みのあとに清風を起こす。我々の行動は、その都度周囲の人々によき影響を与え、世の中を浄化すべきであるという意味に解釈している。もし、一人一人のロータリアンの言葉に、態度に、行動に、またクラブの活動のあとに清々しさと後味のよさを地域社会に強く感じて貰えるようであればと願う。ロータリアンとクラブは、是非そうであってほしいものである。

或る財団奨学生が私に聞いた。「ロータリークラブの会員になるのには、どの程度以上の金持という規則があるのでしょうか」と。笑えぬ話である。我々の残す風に若干でも黄金臭があるのであろうか。金持ちの飯食い会。寄付の会。大衆と縁遠いエリートのと見られている間は、ロータリーも清風を起こしているとは言いがたい」と。実にいい話であります。

この話は、クラブの品格ということをお大切にするロータリーの一面をよく伝えてくれるのであります。一業一会員制で選ばれた良質な職業人が自分の人格を高める自己研鑽、これは自分一人だけで自己研鑽をするのではなく、毎週一回の例会で良質なフェローロータリアンと触れ合いながら、その人格的な影響を意識的・無意識的に受けながら、お互いを高め合う自己研鑽・切磋琢磨でなければなりません。このことによって初めて品格のあるクラブが出来上がると思うのであります。

9. 『品格のあるスマートなクラブ』 その5

前回は、品格のあるクラブを作るには、会員各自が自分一人だけで自己研鑽をするだけでなく、毎週一回の例会で良質なフェローロータリアンと触れ合いながら切磋琢磨しなければならない、ということを示し上げました。ということは、クラブの品格を高める前に、会員各自の品格を高めることが基本前提になっているのであります。

そのためにロータリーは、創立以来、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則を採ってきたのであります。品格のある良質な会員を集めることによって品格のあるクラブが出来るという論理であります。

では、如何にして良質な会員を選ぶか。元来、ロータリークラブというところは、入会したい人が入会申し込みをすれば入会出来るというようなシステムを採っていません。クラブが主体的に、秘かに地域社会の中から良質な人を選び出し、会員選考委員会、職業分類委員会等々14段階の手続を経て、初めて入会が許されるものであります。これは、クラブの閉鎖性がら当然のことでありまして、それ故にこそ、クラブの会員になることは名誉なことであり、会員もロータリアンであることに誇りを持っていたのであります。

ところが、その後、14段階の手続が6段階に簡略化され、更に国際ロータリーの会員増強の声に押され、規制緩和によって現在は、会員の良質性のチェックが余り為されていないようであります。そのために、クラブの魅力がなくなり、入会しても簡単に退会していく会員が増えているのであります。会員の品格がなくなれば、クラブの品格もなくなり、クラブの魅力もなく

なるのは当然のことであります。

昔は、クラブの入会は厳格なものであります。

10. 『品格のあるスマートなクラブ』 その6 ～韋駄天の心～

今日は「韋駄天という仏様」の話をしします。

これは、天皇陛下が未だ皇太子殿下であらせられた頃、宇治の黄檗宗の総本山万福寺をお訪ねになったときの話であります。

接待にでられた御老師は、「自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、そのような俗な話をするわけにはいかない」と言われて、皇太子殿下に『韋駄天』という仏様の話をなさいました。

韋駄天という仏様は、どのような仏様かと申しますと、仏様にも色々位がありまして、最も位の高いのが、阿弥陀如来、大日如来のように名前の下に如来という言葉のついている仏様、そして、その次の位が、勢至菩薩、普賢菩薩のように菩薩という言葉の付いている仏様、そして、更にその下の位が、毘沙門天、帝釈天、韋駄天のように天という言葉のついている仏様であります。この天という字のついた仏様は、どのような役目をもった仏様かと言いますと、私達の日常生活万般のことを司る役目をもった仏様のことなのであります。

では、その中で、韋駄天という仏様は、どのような役目をもった仏様かと申しますと、夜の帳に終わりが参りまして、東の空が白んで参ります。やがて、山の端に太陽がチラッと覗きます。朝日がサッと大地にさして来る、その一瞬を捉えて、仏様の懐から出て、仏様の御使いとして、全世界の家庭を訪れます。

そして、竹中会長のお宅を訪れて窓を開けて、今日一日この竹中家に仏の幸せがありますようにと祈ります。そして、今度は、隣のお宅を訪れて、今日一日この一家に仏

の幸せがありますようにと祈ります。このようにして、朝日が大地に差し込んだ一瞬の内に全世界の家庭を訪れて幸せを祈り、そしてまたその一瞬の内に舞い戻って、只今全世界の家庭に仏の幸せを祈って参りました、と復命をする役目をもった仏様のことを韋駄天というのであります。

御老師は皇太子殿下に『貴方は、やがて天子様になられるお方でございます。今日の老僧との出会いを大切になさって、毎朝、全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏様のいることを心に留めておられますように』という話をされたそうであります。

申すまでもなく、この物語は、帝王学の根底に流れる思想を説いています。即ち、私達は人間である以上、世の中には、好きな人も、嫌いな人も、憎い人も沢山居ます。

にも拘わらず、毎朝その全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、これは天子様にとっては、欠くことの出来ない心であろうかと思うのであります。

ところで、私は、この韋駄天の心は何も天子様に限らず、ロータリアンの心の根底に流れる思想でもあると思うのであります。何故ならば、ロータリアンは、皆、社会の管理者として長たる立場にある人です。凡そ組織の長たる立場にある者は須くこの韋駄天の心がなければならぬと思うのであります。例えば、ロータリアンの会社について言えば、社長が、毎朝、自分の部下将兵の幸せを祈る心をもっていか否かにより、その会社のあり方が違って来るだろうと思うのであります。

11. 『品格のあるスマートなクラブ』 その7 ～韋駄天の心～

前回は、毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏の心は、天皇陛下だけでなく、すべてのロータリアンの心の根底に流れる思想であるという話を致しました。

即ち、この韋駄天の心をもったロータリアンの会社は、恐らくどのような不況期にも潰れないであろうし、長期的に安定した利潤を着々と獲得して行くであろうと思うのであります。では、一体そのようなことを証明する事実があるのか。

実は、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していませんでしたという事実があります。これは、ロータリアンが毎週1回の例会において、企業経営上のアイデアを交換し、倫理的な企業活動のノウハウを開発して、それを自らの企業に実践してきたという職業奉仕実践の功德であると謂われています。したがって、韋駄天の心は職業奉仕の核にある思想でもあると思うのであります。

そして更に、世界中の全ての人達の幸せを祈るこの韋駄天の心は、何も職業奉仕に限らず、社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕等ロータリーの全ての奉仕の実践をするについても、ロータリアンの心の根底に流れる思想であろうかと思うのであります。

世界中の全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、将に、これはロータリアンにとって欠くことの出来ない心、終生肝に銘ずべき心であろうかと思うのであります。

1962-63年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大なロータリーの思想家ニティッシュ・ラハリーは、『世界中の何

処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within』と謂う有名なターゲットを打ち上げました。

これは、真に東洋的な神秘的なターゲットでありまして、心の中に火を燃やすことによって、この世の中を明るくして行こうというのであります。そして、そのためには、私達ロータリアンがこの世の中の全ての人達の幸せを祈らなければならない、とラハリー元会長は呼びかけているのであります。

ロータリアン全てがお互いに幸せを祈り合う、そのようなロータリーであって始めて世界平和の実現に寄与することが出来ると思うのであります。したがって、ロータリアンの皆さん方が、自分の企業を管理するに際しても、更に、地域社会、国際社会に奉仕するに際しても、毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏様が居ることを心に留めておくべきであると思うのであります。実は、ロータリアンとは、その心の根底に韋駄天の心を持っている人達のことであると思うのであります。

このように、ロータリアン一人ひとりの心の中にあるものが大切なのであります。

幸せを祈るという目に見えない大切なものを心の中に籠めること、これがロータリーの中核にある考え方なのであります。したがって、私は、ロータリーは祈りの哲学である、とも考えているのであります。

12. 『決議23-34号の存在意義』 その1

決議23-34号というのは、1923年のセントルイスの国際大会における第34号決議案が紛糾の結果、それを解決するために提案された代案としての第34号決議案の決議のことであり、1923年の大会決議であることから「決議23-34号」と呼ばれているのであります。

さて、この決議23-34号は、1923年までに築き上げられたロータリーの原理体系を総括して、これを一言で言えばロータリーとは斯くの如きものである、ということを経も般若心経のように短文に凝縮して、簡明直裁に宣言したものであります。就中、奉仕の実践原理として特に重要なのは、従来、個人奉仕を原則とした初期ロータリーが、この決議の第6項において、初めて団体奉仕的な社会奉仕というものに厳格な枠を嵌めた上でこれを認めたことであります。

元来、ロータリークラブは、社交クラブとして自治団体でありますから、奉仕の実践についてもクラブ自治権に基づいて自由闊達に行われていたため、その実践の態様は将に様々であり、個人奉仕もあれば団体奉仕もあったのであります。例えば、牧師が馬を死なせて困っているのを見たシカゴクラブの会員達が皆で金を集めて馬を買い与えたり、身体障害者の養護学校を作るためにクラブで金を集めたりして、真に自由闊達に団体奉仕も行われていたのであります。

このように、個人レベルやクラブレベルでは、団体奉仕はロータリー創立当初からクラブ自治権によって自由闊達に行われていたのであります。これを決議23-

34号という国際大会の決議によってR Iレベルで集約し採択したところに大きな意味があるのであります。

ただ、それまでのロータリーは、個人奉仕が原則であるというのが伝統的な考え方でありましたから、ロータリーは皆で金を集めて何かをしようというような団体ではないという考え方が支配的でありました。

そのため、例えば、第一次大戦を契機として1917年度の国際RC連合会長Arch C.Klumphが提唱した「国際理解と親善のための基金」、これが後に至ってロータリー財団となるのであります。この基金についても、当初から金は全く集まらなかったものであります。

しかし、当時の国際ロータリークラブ連合会幹事Chesley R.Perry（後にR I事務総長）は、災害その他緊急時の救済基金relief fundが絶対に必要だと考えて、苦勞しながらもこの基金に金を貯めていたのであります。

実は、これが後に至って1923年、あの関東大震災に際してR Iが救済基金として東京ロータリークラブに25,000\$という大金を贈ってくることになります。米山梅吉さん始め東京クラブの面々が吃驚仰天し、且つ感激して、ロータリーを見直したことは日本ロータリーの歴史上の有名な話であります。

この関東大震災の年に団体奉仕に関する決議23-34号がR Iレベルで採択されたということに、私は何か因縁めいたものを感じるのであります。

13. 『決議23-34号の存在意義』 その2

前回は、ロータリーは創立以来個人奉仕が原則であったため、皆で金を集めて奉仕をするような団体ではないと考えられて居ましたから、例えば、1917年度の国際ロータリークラブ連合会長 Arch C.Klumpp が提唱した「国際理解と親善のための基金」（後にロータリー財団）についても、金は全く集まらなかったこと、しかし、当時の連合会幹事 Chesley R.Perry（後に R I 事務総長）が緊急時の救済基金が必要だと考えてこの基金に金を貯めていたこと、そして、これが後に1923年、関東大震災に際して R I が救済基金として東京クラブに25,000\$という大金を贈ってくるようになったという話を致しました。

ただ、この基金にはその後ロータリー財団になってからも金は集まりませんでした。ではロータリー財団は、一体何時から現在の様に栄えるようになったのか。それは、ポール・ハリスが1947年にこの世を去った時、後に残されたロータリアン達がポール・ハリスの遺志を継ごうと言って立ち上がりました。彼が終生最も強く念願していたものは一体何か。

それは戦争予防のためのロータリーの国際性、ロータリー財団の育成、これは疑う余地はない。そこでロータリー財団に募金をというスローガンが掲げられ、ロータリー財団が一躍国際奉仕の檜舞台に立つようになったのであります。

元来、団体奉仕は、前回も申し述べたように個人レベル、クラブレベルでは、1905年の創立以来、クラブ自治権に基づいて自由闊達に様々なものが実施されて

いましたが、それは当然の事ながら各クラブ毎にバラバラでありました。

それがアメリカ社会における身体障害者養護学校設立の運動を契機として、ロータリーのごく一部の真に小さなエネルギーがこの運動に加わることによってロータリー分裂の危機を招くほどの大論争となり、その結果、双方の寛容の心の自覚によって、「決議23-34号」という国際大会の決議として、R I レベルで団体奉仕を認めたことは、ロータリー運動にとって将に画期的なことであります。そして、いみじくもその同じ年に発生した関東大震災に際して R I が救済基金を送ってきたことには、このような深い意味があることに思いを致さねばならないと思うのであります。

今のロータリアンが、歴史というものを学ばず、したがって、何らの原理認識もなく、ロータリーは個人奉仕だ、いや今はもう団体奉仕などと薄っぺらな議論をしています。20世紀初頭のロータリアン達が様々な葛藤の末、将に苦渋の選択として団体奉仕を生み出した、その先輩達の様々な悩みを知らなければ、ロータリーというものの真の理解はあり得ないと思うのであります。

何はともあれ、衰退した今のロータリーを20世紀初頭の素晴らしいロータリーに復活させることは、将に永遠のテーマであり、私達はこの永遠のテーマの実現に終生努力しなければならないと思うのであります。これがお世話になったロータリーに対するロータリアンとしての努めであると思うのであります。

14. 『露口四郎』 その1 ～クラブ幹事歴任13年～

日本ロータリーの歴史は、僅か1世紀にも満たない精々80年足らずの歴史であります。私達の先輩達は、20世紀が戦争と革命の世紀だと謂われたその激動の時代を見事に生き抜いて、素晴らしい精神伝統を残してくれているのであります。その思想の歴史に学ぶことが、未来のロータリーを正しく展望するためには欠くことの出来ないことであろうかと思うのであります。

その中でも、私達が肝に銘じて絶対に忘れてはならないEpoch makingな出来事は、昭和15年、軍閥の弾圧による日本ロータリー壊滅の物語であります。

この時、ロータリーと謂う組織は壊滅しましたが、ロータリー思想は消えなかったのであります。戦前、戦中、戦後のロータリー。大正9年1920年から昭和15年1940年に至る20年間のロータリー運動のエネルギーが如何にして形成されたか。戦前の歴史は、ロータリー日本史の中核であります。このエネルギーの延長線上に戦中、戦後の歴史があるのであります。私達は、この戦前の思想史を検証することなく、未来を正しく展望することは出来ないのであります。

ところで、ロータリー日本史を勉強するに際しては、二つの書物を手元におかなければなりません。

一つは、大阪クラブの露口四郎氏編纂の【大阪ロータリークラブ50年史】。

一つは、神戸クラブが出しているロータリー史。これには、【我らの集い】【世界と共に】【神戸ロータリークラブの歴史】の三冊がありますが、これらを集約したものが直木太郎パストガバナー編纂の【ロー

タリー日本50年史】であります。したがって、ロータリー日本50年史は、神戸ロータリークラブの歴史をもとにして書き上げられたロータリー日本史の記述であります。

なお、私は、直木さんからは、直にお話をお聞きしたり、何回か手紙を頂いたりして、日本のロータリーの歴史を色々教えて頂きました。

ところで、【大阪ロータリークラブ50年史】は、露口四郎氏の編纂に係るものであります。露口氏は、大阪ロータリークラブ幹事歴任13年3ヶ月、引き続いて金曜会時代も幹事歴任4年2ヶ月、引き続き、戦後、国際ロータリーへ復帰後も、幹事歴任4年3ヶ月、合計21年8ヶ月に亘って亘ってクラブ幹事を歴任されたのであります。同時に、会報編集委員長は、戦前・戦後を通じて22年歴任されているのであります。露口氏がこの体験をもとにして、ロータリーの生き字引として書いたものが【大阪ロータリークラブ50年史】であります。

これは、露口氏が、自分の体験の中で、原理の裏打ちをもって歴史を書いているので非常によい書物であります。

実は、たまたま露口氏の御子息が、私と同期の弁護士である露口佳彦君でありまして、関西千種会に所属しておられるのであります。私は露口君から御尊父露口四郎さんのノートのコピーを頂きましたことも附言しておきます。

15. 『露口四郎』 その2 ～大阪クラブ創立～

今日から日本の第2本家クラブ、大阪ロータリークラブ創立の物語に入ります。

米山梅吉さんと共に東京ロータリークラブを創立した福島喜三次さんは、1921年、大正10年3月、東京クラブの第3回目の例会である第2水曜日を待たずに左遷により大阪支店勤務になりました。したがって、東京クラブでは例会に2回出席しただけで何もしないまま退会し、大阪に来ることになりました。実はこれが大阪クラブ創立の物語に繋がるのであります。福島さんの奥様曰く、『主人は、東京クラブでは上下の階級構造があったので小さくなって息も出来ないような有様でしたが、関西の実業家達は心が大らかで、全ての人達を平等対等に遇する雰囲気でしたので、主人は水を得た魚のように澁刺としました』と。

ここで彼は、後に大阪クラブの創立者となる星野行則氏とロータリーについて語り合う機会を得たのであります。殊に、大阪商船社長の村田省蔵氏とは生涯をかけての付き合いとなり、二人の子供達同士まで兄弟のように付き合いようになったのであります。このことは、二人の付き合いが如何に精神的な深さを持っていたかを物語るものであります。

何はともあれ、福島さんは、大阪の実業家に暖かく迎えられまして、その時に、星野行則氏を指導者とする関西の財界人に対して、テキサスのダラスで経験したロータリー運動即ち、1915年に書かれた初期ロータリーのバイブルである Guy Gundaker の【ロータリー通解】を中核とするロータリーの正当派理論というものを十分に解説する機会に恵まれたのであります。

そこで、大阪の実業家達はロータリー理論を知り、東京にロータリークラブが出来た以上は、大阪にもロータリークラブを作らなければなるまいが、そのためには心の準備をしておく必要があるというので、1922年、大正11年春に、星野行則氏を団長とする関西実業家による訪米経済使節団が編成されたときに、福島さんが事前の折衝をして、星野氏をシカゴで国際ロータリーの事務総長 Chesley R.Perry に面会させたのであります。

Chesley R.Perry は、大変喜んで、『君が大阪に戻って、大阪にロータリークラブを作るのであれば、国際ロータリー理事会は、その全権を委任する準備が出来ているが引き受けてくれるか』と言ったところ、星野氏はこれを快諾したのであります。この時、星野氏は、Chesley R.Perry からロータリーに関することを色々教えられたのであります。この年は、標準ロータリークラブ定款が採択された年でありましたから、彼の受けた情報は最新のものであったのであります。

やがて、国際ロータリーから、星野氏を特別代表とするとの任命書が来て、ここに、日本の第2の本家クラブである大阪ロータリークラブが国際ロータリーの直轄で誕生することになったのであります。時に1922年、大正11年11月17日のことでありました。

16. 『露口四郎』 その3～大阪クラブ創立～

前回は、大阪クラブの初代幹事福島喜三次さんは、クラブ管理の大黒柱であるクラブ幹事を育てることが最も大事であるとして、クラブの事務職員として大丸百貨店から出向していた露口四郎さんにロータリーの原理を教えて、その翌年、露口さんをロータリアンとして入会させてしまったということ話を話しました。

この話は、何とも実に大らかであり、社長であれ事務職員であれ何の分け隔てなく、何のこだわりもなく同じクラブの仲間として入会させてしまうなどと謂うことは、一般世間の常識から謂えば考えられないことであります。このことは、大阪ロータリークラブが社交クラブの本質を弃えた自由闊達なクラブであることを象徴的に表しているのです。

明治の先覚者福沢諭吉先生が「神は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と謂ったように、ロータリーも「ロータリアンの上にロータリアンを作らず、ロータリアンの下にロータリアンを作らず」でありまして、ロータリーの世界は、このように万民平等の世界なのであります。だからこそ、うわべだけの付き合いでなく、心の友ばかりが集う本当の親睦、所謂ロータリーの精神的親睦が出来上がったのであります。

大阪商船社長の村田省蔵さんと三井物産の社員福島喜三次さんとの生涯をかけた友情が育ったのもその好例であります。この精神的親睦こそロータリーの綱領の第1に所謂「心の友を得て以て奉仕の契機と為すべきこと」の意味する全てなのであります。

このような大阪クラブの親睦が醸成されたことは、大阪の実業家のこだわりのない

心の広さもさることながら、福島喜三次さんの力に負うところが大きいのであります。即ち、福島さんが露口さんに教えたロータリーは、福島さんがダラスクラブに在籍していた頃に読んだと思われる Guy Gundaker の「ロータリー通解」によるものでありますから、福島さんは、先ず、親睦から初めて、時間励行と出席率とで会員を例会に引きつけ、その上、当時としては珍しかった家族同伴の小旅行や運動会、それに趣味の同好会などを盛んに催し、更に日本語の大阪ロータリークラブの歌を作ったり、ロータリー小唄を作ったりして、楽しいクラブとして評判になったのであります。

そして、ロータリーの精神である奉仕の理念やクラブの規則通りの運営などを、当時の日本の社会の実情に調和させようと努力し、いち早く、定款や推奨クラブ細則その他を翻訳しているのであります。

しかも、初代会長星野行則さんが訪米使節団の一行と共に渡米した際に、シカゴにおいて時の R I 事務総長チェスレー・ペリーから直伝且つ最新の情報を与えられていましたから、大阪ロータリークラブは、創立当初から理論付いていたのであります。その後を受けて露口四郎さんが戦前、戦中、戦後27年間に亘って大阪クラブの幹事職を歴任したのであります。

17. 『戦前の日本ロータリーの特徴』 その1

前は、露口四郎さんが戦前、戦中、戦後27年間に亘って大阪クラブの幹事職を歴任したということをお話しましたが、東京クラブでは小林雅一さんが11年間幹事を歴任しておられます。これは、戦前のロータリーが幹事を重視していたことを物語るものであり、戦後のロータリーとは著しく異なる点であります。

そこで、戦前のロータリアンの特徴を挙げますと、ロータリーを思想の世界で受け止めようとしたこととあります。上物作り、即ち制度には、興味を示さなかったのとあります。一言で言えば、ロータリーとは一体何か、ということを追求め、深層心理においてロータリーを理解したのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーからの手紙によりますと、『戦前の日本のロータリーは、ロータリーを外来思想の一つとして受け取っていた。外来思想と謂えば、既に仏教、儒教、キリスト教が入って来てをり、明治維新後は、更にヨーロッパのデモクラシーやマルキシズムのような思想が入って来ていた。ロータリーもそれらの一つであると考えられていた。

そのため、ロータリーの思想とは一体どのようなものか、それは、外来思想や従来の日本古来の思想である国学や報徳教の思想などと比較して、何処が違い、何処が同じなのか、について大いに研究が進められた。

結局、報徳教の教えに最も近いものであるとせられ、これが、昭和3年東京における太平洋地域会議Regional Conferenceで、大阪クラブの土屋大夢の『ロータリー以前の偉大なロータリアン』と題して、二宮尊徳翁の思想の紹介となった。

また一方、仏教に所謂「布施」よりも、そのような必要のないように国を富ませる方がよいのではないか、という実業家らしい意見もあった。この考え方は、松下幸之助さんの考え方に連なるものであって、昔、三菱商事の或る若い社長の「企業の社会的責任」についての質問に対して、「二万余の社員と多数の家族とを豊かに養い、ドンドン金を儲けて多額の税金を支払い、更に事業を拡大して、社会の便宜を図ることである」と答えている。

これが、今日、松下さん始め多くのロータリアンの考え方に近いものではないかと思う。しかし、自分は、ロータリー精神は、そのような物質的なものではなく、もっと深い精神的思想であると考えていた。

勿論、日本の二代目ガバナー井坂孝さんのように、既にロータリーの組織や運営に関心を持って、それを説いた人もあったが、多くのロータリアンは、そのような組織・制度よりもロータリーをただ外来思想の一つと考えていたのである。

第二次世界大戦となって、他の外来思想と共に、軍部や右翼から弾圧されて、遂に国際ロータリーを脱退せざるを得なくなったのもそのためである。』と。

要するに、直木さんによれば、戦前の日本のロータリアン達は、思想を中心にロータリーを理解しようとしたと謂うこととあります。

18. 『戦前の日本ロータリーの特徴』 その2

前回は、大阪クラブの露口四郎さんが戦前、戦中、戦後27年間に亘って幹事を歴任され、東京クラブでは小林雅一さんが11年間に亘って幹事を歴任されたことを申し上げました。この小林さんは後に至って国際ロータリー会長にまで擬せられた人ですが、惜しくもその直前にこの世を去られたために日本人として最初の国際ロータリー会長は実現しなかったのであります。このように当時から、幹事は、クラブの大黒柱、クラブ管理のオーソリティでありました。

これらのことは何を意味するかと謂いますと、有能なクラブ幹事が何年にも亘ってクラブの実務を一手に掌握し管理していくというのが古き良き時代のロータリーの慣行であったのであります。最も長い記録としては、1910年に創立されたフィラデルフィア・ロータリークラブが1960年に創立50周年の記念イベントとして幹事歴任50年慰労会を催したという記録が残っています。

要するに、16世紀以降、そもそもクラブという社会制度の濫觴を見れば明らかのように、元来、クラブというものは、幹事がクラブの実務一切を取り仕切っていたのであり、会長などというものは必ずしも必要としなかったのであります。したがって、ロータリークラブもクラブ制度の原理に従って伝統的に幹事を重視して来たのであります。これが戦前の古き良き時代のロータリーの伝統であり、日本ロータリーもそれに倣っていたのであります。将に幹事は大黒柱でありました。だからこそ大阪クラブの露口四郎さんや東京クラブの小林雅一

さんのような素晴らしい幹事が生まれたのであります。そして、素晴らしい幹事が何年にも亘って歴任することによって、それぞれ素晴らしいクラブライフを作り上げてきたのであります。

ただ、このようにして出来上がった東京クラブと大阪クラブもそれぞれのクラブ自治の結果、当然のことながら当初はそれぞれその個性が全く異なりました。

そこで、東京ロータリークラブと大阪ロータリークラブとを比較してみますと、著しい特徴が見受けられます。

先ず、東京ロータリークラブの特徴として、社会奉仕に重点があるかに見受けられるのは、ロータリーの出発点における関東大震災とその義捐金などに影響されたものと考えられるのであります。大震災を契機として弱者保護に重点を置き、著しく行動的でありました。米山さんがこれに傾いたのは、この時の衝撃が原因であることは明らかであります。

これに対して、大阪ロータリークラブの特徴としては、どちらかと言えば職業奉仕に重点があり、大正11年創立当初から理論付いてをりまして、対社会的にはあまり行動的ではありませんでした。優れて精神的であり、親睦とその内容である職業奉仕重視が特徴であります。これは当初から福島喜三次さんの話をよく聞いてGuy Gundakerの思考が浸透して居たと謂えるのであります。

19. 『ロータリークラブの発祥』 その1

今日はロータリー創立記念日でありますのでロータリーの濫觴の物語を致します。

先ず、20世紀初頭にロータリークラブはどのようにして始まったのか。

シカゴの街のNorth Dearborn 街のユニティビル711号室に鉦山技師のGustavas Loehrの事務所がありました。

この事務所ですら当時37歳の無名の青年弁護士であったポール・ハリスが、Gustavas

Loehr、Sylvester Shiele、Hiram Shoreyの三人の友達に語りかけて出来上がった運動が後に至ってロータリークラブと呼ばれるようになったのであります。

これが第1回目の会合でありまして、1905年2月23日のことでありました。ただ、この時点では、ロータリーには、大した原理の裏打ちはなく、親睦のための一業一会員制の原理を自覚したに止まり、クラブの役員任命もなく、クラブの名称も未だなかったのであります。したがって、この第1回目の会合をもってこれを「創立総会」と呼ぶことは妥当ではありません。

この会合は法律的には、「設立準備会」と謂うべき性格のものであります。

ただ、国際ロータリーは、この日をもってロータリー創立記念日としています。これは創立総会があったということではなくて、ロータリー創立の最初の因縁が熟した日という意味であろうかと思えます。

法律的な意味での創立総会は、会員9名をもって、役員任命、クラブ名称決定等が行われた3月23日の第3回目の会合であります。したがって、シカゴクラブのチャーターメンバーも、創立総会時点における会員であるという理解からすれば、

その9名ということになります。但し、創立当時は、未だチャーターの理論は存在しませんでした。何故かと謂いますと、当時はシカゴクラブ一つしか存在しなかったからであります。元来、チャーターの理論というものは、1910年に全米ロータリークラブ連合会が創立されて以降の概念であります。

では、どのようにしてチャーターの理論が出てきたのか、と言いますと、実は、ロサンゼルスにロータリークラブが二つ創立されてしまっていて、それぞれのクラブが自分のところが本家だ、正当なロータリークラブだと主張して争いになったのであります。

結局、この二つのクラブは、合併することによって決着がついたのであります。このことが契機となって、それ以後は、連合会から認証状即ち、チャーターを受けたクラブを正当なロータリークラブとして認めようということになったのであります。これがチャーターの理論でありまして、これ以後、チャーターナイト即ち、認証状伝達式が行われるようになったのであります。

何はともあれ、1905年2月23日、一職種一会員制を柱とする職業人の社交クラブの第1回目の会合がシカゴの街のUnity Buildの711号室即ち、ポール・ハリスの友人、鉦山技師のGustavas Loehrの事務所で行われたのであります。これがロータリーの濫觴の物語でありました。

20. 『ロータリークラブの発祥』 その2

前は、1905年2月23日、一職種一会員制を柱とする職業人の社交クラブの第1回目の会合がシカゴの街のUnity Buildの711号室で持たれたことを話しました。

そこは、ポール・ハリスの友人、鉱山技師のGustavas Loehrの事務所でありました。ポール・ハリスは、友人の洋服屋のHiram Shoreyにそこで落ち合うことを約束して、自分はSylvester Shieleを誘ってその事務所へ行き、4人で話し合いをしたのであります。これが後に至ってロータリークラブと呼ばれるものの最初の会合でありました。

なお、ポール・ハリスが、Sylvester Shieleと一緒にGustavas Loehrの事務所へ行く途中、マダム・ガリというイタリア料理店に立ち寄っていますが、彼がそこで何を食べたかなどを謂うことを議論する人がいます。しかし、そのようなことは、ロータリーの歴史を勉強するについては重要なことではありません。このようなことを法律的には、判決に影響を及ぼさない事実immaterial factと謂うのであります。

このような重箱の隅をつつくような議論をせずに、もっと大づかみに歴史の芯を掴んで行かなければなりません。即ち、目に見える現象に惑わされずに常に本質を見る姿勢がなければ、制度の本質も思想の実体も会得することは出来なからうと思うのであります。

さて、そこでまず、ポール・ハリスは、皆が仲よく親類付き合いをして互いに助け合う職業人のクラブを作ろう、そのためには、一つの職種から一人だけ会員を

採るようにして同業者を排除すれば、職業人同士であっても仲よく親類付き合いが出来るということを提唱しました。そして、4人はお互いにその原理を確認したのであります。これは、仲良くなるための親睦の核心にある原理であります。

それから、親類付き合いといっても、4人では大したことは出来ない。やはり、先ず会員を増やさなければならない、というので、第2回目の会合を2週間後の3月9日にポール・ハリスの弁護士事務所で開催することを決めて解散しました。

したがって、第1回目の会合では、親睦のための一業一会員制の原理が確認されただけに止まるのであります。したがって、第1回目の会合は、法律的には、創立準備会たる性格のものであり、法律的にみて創立総会に当たるものは、役員への任命、クラブ名称の決定等が行われた3月23日の第3回目の会合であります。

ところで、第2回目の会合までに、新たに2名の会員が入会しました。一人は印刷業者のHarrry Ruggles。他の一人は不動産業者のWilliam Jensonでありました。

この第2回目の会合までに参加した6名の会員は、Pioneer Veteranと謂われて別格のロータリアン扱いにされる傾向がありますが、ロータリー運動に対する貢献度を中心に評価しますと、この中には優れた人も居れば、そうでない人も居たのであります。次号以下にその人物像に触れておきます。

21. 『ロータリークラブの発祥』 その3

前回は、第2回目の会合までに参加した6名の会員は、Pioneer Veteranと謂われていますが、ロータリー運動に対する貢献度から見ると、この中には優れた人もそうでない人も居たと申しました。そこで、その人物像を紹介しておきます。

先ず、Gustavas Loehr。この人の職業分類は鋳山技師であります。第1回目の会合に事務所を提供したかなり骨のある職業人であったと言われてしています。

鋳山技師とは謂いますが、「山師」という言葉もありますように、やはり一夜成金、一夜乞食のという大変不安定な業界でありますから、或る日、突然破産して、自殺によってこの世を去る、という悲惨な最後を遂げたために、ロータリー運動の中では、彼の功績は何一つとして初期ロータリー発展の記録の中に残されていないのであります。大変残念な人物であります。

次に、Sylvester Shiele。この人の職業分類は石炭商であります。シカゴロータリークラブの初代会長でありまして、第3回目の会合に事務所を提供しました。

実は、初代会長については、ポール・ハリスが自薦をしてもおかしくはなかったのですが、彼は、この種の運動が成功するためには、互譲の精神が大切であると考えて、自分は一步を譲り、Sylvester Shieleが大変世話好きな男であり、指導者としてふさわしい男であったので、このよき日よき場所を記念する意味において、ここの経営者であるSylvester Shieleを初代会長に推薦したのであります。

Sylvester Shieleは、終生、ロータリー運動の発展について深い関心を持ってお

り、ポール・ハリスの良き相談相手でありました。したがって、墓もポール・ハリスと並んで建てられているのであります。

ポール・ハリスの著書の中に次のような興味深い記事があります。

『冬になると雪が降る。一面、銀世界となった家の裏に、ポールの台所から人の足跡が始まり、それがSylvester Shieleの家台所のところで終わっている。絶えず二人の家の間にはこういう足跡があった。そういう状況であった』と。

オーストラリアのメルボルンクラブから出た元R I会長のAngus Mitchelの晩年の追想録の中に出てくる話によりますと、Sylvester Shieleの別荘がミシガン湖のほとりにあって、夏になると、そこにポール・ハリス夫妻とSylvester Shieleの家族が寄る時には、Angus Mitchelがメルボルンから飛行機でやって来て、夏のウィークエンドを3家族で楽しく過ごしたと謂うのであります。

勿論、これは、大分後になっての出来事であろうとは思いますが、このことはロータリーの親睦というものは将に世界的親睦であったといえるのであります。

Sylvester Shieleは、シカゴクラブの創立総会において「石炭業界の展望について」というスピーチをしています。実は、これがロータリーにおけるイニシエーションスピーチの始まりであると謂われているのであります。このように、Sylvester Shieleは、中々立派なロータリアンでありました。

22. 『ロータリークラブの発祥』 その4

前回は、Gustavas Loehr と Sylvester Shiele についてその人物像を紹介しました。

そこで、今日は Hiram Shorey について紹介します。職業分類は洋服商であります。

非常に打算的な人であったと言われていまして、会員同士は原価の取引をするといっても、会員が増えると洋服は全部自分の店で作るということになれば商売もうまく行く、というように、何時も計算をしたと謂われています。

元来、ロータリーの世界は、打算の世界ではなく愛情の世界でありますから、打算の論理には馴染まないのであります。したがって、彼は、後にロータリー運動が必ずしも人の和を得られなくなるに及んで、シカゴクラブを退会して故郷のメインに帰ってしまいました。そして、後年、ロータリーが発展して、メインにもロータリークラブが出来た時にも入会せず、終生、ロータリークラブには復帰しなかったの、あまり大したロータリアンではなかったと謂えるのであります。

しかし、ポール・ハリスは、この出来の悪いロータリアン Hiram Shorey のことを 1934 年の著書 "This Rotarian Age" の中でも悪く言っていないのであります。

『Hiram Shorey は、その後、実家の都合により、故郷のメインに帰らざるを得なくなり、シカゴのクラブを退会するに至ったが、この古き良きロータリーの慣例を今日に至るまで、懐かしく思い起こしておられるのである』と。

ポール・ハリス一流の人を責めない文章であります。しかし、この記事によって、Hiram Shorey があまり大したロータリアン

でなかったことが判ると思うのであります。

次は William Jenson であります。職業分類は不動産業者であります。第2回目の会合から参加して。1907年にシカゴクラブの幹事も務めた人でありますが、シカゴクラブでは、その頃から奉仕派と親睦派との紛争が起こったためシカゴクラブに嫌気がさしてロータリークラブを退会しました。

ただ、彼は、大変長生きをしたため年老いてからカリフォルニア州に移り住む頃にはロータリー運動も全米に広がっていったので、新しいクラブの人達から名誉会員になる依頼を受け、いくつかのクラブの名誉会員になって、結構クラブライフを楽しみながらこの世を去ったと謂われています。したがって、あまり大したロータリアンではなかったが非常に要領のいい人であったと謂えます。

次は Harry Ruggles であります。職業分類は印刷業者であります。ロータリークラブに5番目に入会したので第5ロータリアンとも呼ばれています。

彼は、Charles A. Newton、Dr. William R. Neff と共に初期のシカゴクラブの管理権を握った親睦派の大立者であり、終生ポール・ハリスの政敵でありました。

ロータリークラブの中にロータリーソングの慣例を作り出したり、ロータリーのエンブレム（バッジ）を作ったりした中々立派なロータリアンでありまして、数々のエピソードがありますが、それについては次回に申し述べます。

23. 『ロータリークラブの発祥』 その5

前回紹介した Harry Ruggles は、所謂、パイオニア・ヴェテラン6名の中で、大学を出たのはポール・ハリスとこの Harry Ruggles の二人だけでありまして、彼は一見、杓子定規な融通のきかない男でありましたが、クラブ親睦を守るために、ロータリーソングの慣例を作り出したことでも有名であります。

彼は、若くして苦学をして North Western 大学の夜学に入り、生活費を得るために印刷工場に勤めましたが、社長から見込まれてその会社の持株を半分譲り渡され経営者の地位に就きました。その後、その社長が引退する時に社長の持っている残存株式を全部買い取ってその印刷工場の社長になったのであります。

Harry Ruggles は、大変長生きをして会社は長男に譲り、悠々として栄えたと言われています。カリフォルニアに別荘を造り、カリフォルニアのロータリークラブの会員になり、初期ロータリアンの中で、これ位クラブライフを楽しんだ人は居ないと言われるくらい立派なロータリアンでありました。

Harry Ruggles のエピソードを一つ紹介します。1959～60年度の R I 会長であった Harold Thomas が会長を辞めてから出版した【ロータリーモザイク】の第一章に大変面白い物語があります。即ち、Harold Thomas が R I 第1副会長としてカリフォルニアのローンディルロータリークラブの認証状伝達式に出席して初期ロータリーの話をしました。彼は初期ロータリアンの行動を美化して、『初期のロータリアンは、クラブライフの中で美しい友情が

通い合っていて、その友情をもとにした発想交換の中から後に至って職業奉仕と呼ばれる類い希なる概念を生み出したのである』という話をしたところ、誰かが『ナンセンス!』と叫んだのであります。

Harold Thomas は、『この式が終わったら今発言した人と話したい』と言いました。

時の地区ガバナーとして、この時の司会をしていた Carl P. Miller が側から、『今のは、Harry Ruggles です』と教えて呉れました。そして、式典の後、二人は、胸襟を開いて語り合い意見を調和させることが出来て立ち去ったと謂います。

しかし、果たして、どのような形で調和出来たのか、疑問なしとしません。

Harry Ruggles は、何故、「ナンセンス!」と叫んだのか?

まず、Harry Ruggles は、少なくとも、初期のシカゴクラブの大黒柱であったことがこれによって判ります。次に、彼が、ロータリーの在り方に就いて自分なりの信念をもっていたことも意味しています。更に彼は、Harold Thomas の解説した所謂ロータリーの親睦がやがて職業奉仕に転化していくと謂う仮説を絶対に採らないということの意味しているのであります。

何故、そのような結論になるのか?

Harry Ruggles は、ロータリーの世界で親睦だけを貫いた人、所謂原始ロータリーの世界に生きた人だったからであります。

そして彼は、自分の考えを一生涯変えなかったのであります。

24. 『ロータリークラブの発祥』 その6

前は、Harry Ruggles のエピソードを一つ紹介しました。それは Harold Thomas が R I 第 1 副会長としてカリフォルニアのローンディルクラブの認証状伝達式において、初期のロータリアンの友情をもとにした発想交換の中から職業奉仕が生まれた、と話したところ、Harry Ruggles がナンセンスと叫んだのは何故か、ということについて、それは Harry Ruggles がロータリーの世界で親睦だけを貫いた人、所謂原始ロータリーの世界に生きて人であったからだとして申しました。

彼が初期ロータリーの実情について考えていたものは、1905年2月23日から1906年にかけてポール・ハリスや他のロータリアン達が考えていたものと全く同一でありまして、実はポール・ハリスの方が1907年から奉仕を自覚したために Harry Ruggles と考え方を全く異にするに至ったのであり、その二人の心の遍歴の相違が互いに政敵たる地位に立たしめるに至ったのであります。

即ち、1905年からポール・ハリスと Harry Ruggles は、親睦の道を一緒に歩きました。そして、1907年、ポール・ハリスだけが方向を変えて、その方向から奉仕が生まれました。所謂精神的親睦から職業奉仕が生まれたのであります。ところが、Harry Ruggles は、ひたすら真っ直ぐに行きました。奉仕の概念は、生まれませんでした。そこには一番最初のロータリーの親睦、所謂感性的親睦だけがありました。

この二つの見解の対立であったわけであります。

ところで、Harry Ruggles は、ロータリー

の中で親睦の世界にだけ生きて人でありましたから、本人の主観においては、世のため人のための奉仕などと謂う意識は毛頭なかったと思われまます。

ところが、ロータリーソングの慣例が、やがては、シカゴの街角に歌を生み出し、遂には、民衆の合唱運動『歌の週間』National Week of Song として実を結ぶに至ったのであります。これは、Harry Ruggles 本人の主観の如何に拘わらず、客観的に見れば立派な社会奉仕であります。

これとは逆に、ロータリアンが主観的には奉仕だと思ってしたことが、客観的に見るとロータリアンの独りよがり奉仕になっていない、したがって地域住民から馬鹿にされることもありまして、これはロータリアンたる者の常に謙虚に反省すべきところであります。

以上が、ロータリーのパイオニアヴェテラン6名のプロフィールであります。このように初期ロータリアンの中にも、出来、不出来があったと謂うことでありまして、これは人間である以上当然のことであります。

なお、注意しなければならないことは、ロータリアン一人ひとりが呉越同舟でありまして、ある時点では同じ呉の船に乗っていて、それが後に越になったりして、今日においてもロータリアンのロータリーの本質に対する認識は、全く同一なものはありません。これは、あり得たらおかしいのでありまして、あり得なくて良いのであります。

25. 『ロータリークラブの発祥』 その7

前回は第2回目の会合までに参加したパイオニアヴェテラン6名の横顔を紹介しましたが、1905年3月9日の第2回目の会合は、ポール・ハリスの弁護士事務所で開催されました。このときは職場持ち回りの原則を決めています。

その趣旨は、我々は一職種から一人だけ参加して心を通わせ合おうということであるから職場を中心に例会を開こうと謂うことでありました。

ただ、この原則は、比較的早く維持できなくなりました。先ず第一に、会員が増えて行きますから職場では会場としては手狭になってきます。

更に、その後、第6回目の会合が開かれたときに、3回目の会合から参加したCharles A. Newtonが食事をしていたために遅刻しました。その事が契機となって例会で食事を共にしようということになり、その結果、約1年間はレストラン持ち回りという原則になりました。

そして、その後、メイクアップの制度が出来ますと、このレストラン持回りの原則も一カ所に定着せざるを得なくなったのであります。

このように、職場持ち回りの原則は、Charles A. Newtonの出来事があったから、いち早く修正されてしまったのであります。

要するに、第2回目の会合では職場持回りの原則を決めただけでありまして、6名では少ないので、もっと会員を集めるべく3月23日にSylvester ShieleのCoal Yard石炭置き場で第3回目の会合を開くことを約して解散しました。

そこで、第3回目の会合までに参加した会員は3名であります。

先ず、Charles A. Newton。職業分類は損害保険の代理業者であります。この人はHarry Ruggles、Dr. William R. Neffと共に、初期シカゴクラブの親睦派の大黒柱であったと同時に初期ロータリーの慣例を悉く記憶していたと謂われます。この故に、初期ロータリーの『稗田の阿礼』と謂われているのであります。したがって、判らないことがあれば、Charles A. Newtonに聞けば凡そ正しいことは覚えていたと謂うことであります。

彼は、1923～24年度のシカゴクラブの会長職を務めました。その会長の時に、何時までも人間の記憶に頼ってはいけないうので、シカゴクラブの歴史編纂事業に手を付け、歴史委員会History committeeを作りました。ロータリアンが、歴史付くのは1924年以降のことです。Charles A. Newtonの存在は、今日のロータリーの軌跡を勉強するについて、その出発点になった大ロータリアンであったことが判るのであります。

なお、Charles A. Newtonは、損害保険の代理業者でありましたから、一業一会員制の原則によってシカゴクラブに入会できなかった同業者のMelvin JohnsがBusiness Circleというクラブに入会し、後に至って1917年、ライオンズ国際協会を設立するに至るといふ因縁を持っているのであります。

26. 『ロータリークラブの発祥』 その8

前回は、7人目のロータリアン Charles A. Newton の横顔を紹介しました。

そこで今日は8人目の Albert White であります。職業分類はオルガン製造業者であり、シカゴクラブの第2代会長を務めました。この人も立派なロータリアンでありまして、この人の会長の時に有名な Donald Carter の物語が起こったのであります。

そして最後に Arthur Irwin であります。

職業分類は洗濯業者であり、この人も、ポール・ハリスが奉仕を提唱したときにポール・ハリスの懐刀となって、いつもポール・ハリスの側にいたと言われていました。

このように、第3回目の会合までに入会した3名は、皆、立派なロータリアンでありました。

そして、1905年3月23日、第3回目の会合は、Sylvester Shiele の Coal Yard 石炭置場で開かれました。この日までの参加人員は、計9名となりました。

そこで、ポール・ハリスは、一つの政策判断に迫られました。即ち、会員9名というのは、社交クラブの会員数としては如何にも少な過ぎる。もう一回会合を持って更に会員の増強を計ることがよいのか、或いは、取り敢えずは9名で出発して、その後で会員を増強した方がクラブ発展のためになるのか、ということであります。

結局、ポール・ハリスは、「今や機は熟した。よって役員任命を行うべきである」という提案をして、クラブとして発足することになったのであります。

このようにして、この会合が法律的に見れば創立総会に当たるのであります。何故なら、クラブ役員任命、クラブ名称決定、

クラブ会員の資格に関する原則などが決定されたからであります。

そこで先ず、役員任命であります。初代会長については、ポール・ハリスの提案によって Sylvester Shiele が選任され、以下、記録担当幹事 Hiram Shorey (統計係幹事)、通信担当幹事 William Jenson。会計 Harry Ruggle が選任されました。

なお、S A A は、現在ではクラブ役員であります。この当時は未だ存在していません。これは、1906年に初めて正式の職制となりました。初期のシカゴクラブの慣行形成は、ポール・ハリスと Max Wolf、そして Charles A. Newton の3人の合議によって決められて居たと謂いますから、恐らくこの3人の合議の中から S A A (Sergeant At Arms) の制度も生まれたのであろうと推測されます。

そこで、Initiation Speech であります。初代会長の Sylvester Shiele が、この日を記念して「石炭業界の展望に就いて」というスピーチをしています。これが、実は、ロータリーの慣例の中における Initiation Speech 第1号であります。

この時は未だ奉仕という考え方はありませんが、ロータリー運動の中における Initiation Speech の位置づけを正しく示していると謂えるのであります。

27. 『ロータリークラブの発祥』 その9

前回は、ロータリーの慣例の中における Initiation Speech 第1号の話をしました。

この Initiation Speech というのは、会員が職業分類によって示された自分の職業を営むに当たって、どのような職業観を形成するに至ったか、と謂うことを同僚の会員に対して開陳するものであります。

これは、ロータリークラブが職業人のクラブ・職業分類クラブ (Classificationclub) であることの当然の帰結であります。

『自分は、今まで斯く斯くの職業を営んで来て、今般、ロータリークラブに入会させて貰ったが、その職業を営むについては、斯く斯くの職業観・経営哲学を持っている。

至らないところは教えて頂きたい。これから仲良くお付き合いを願いたい』と言うだけのことでよいのであります。

現在行われている Initiation Speech というものは、新入会員が、長々と自分の履歴を喋って居るのが通例であります。ロータリークラブが職業分類クラブの性格を持っていることを考えますと、これは、肝心なところを忘れていたと言わなければならないのであります。

次に、創立総会に当たる第3回目の会合において、クラブ組織に関する重要な原則として、会員資格の得喪に関する原則を決めています。即ち、4回連続して欠席したるものは、自動的に会員資格を喪失すべきものと定む、と言う原則がこの会合の議事録に載っているのであります。

この当時は、未だ『奉仕』の概念はありませんでしたが、この原則は、ロータリー運動の創立総会の場で既に原則化されていたわけでありす。

ただ、この原則は、法律的に見るとあまり出来がよくないのであります。何故ならば、誰でも病気をすれば4回欠席することもあり、また、どうしても抜けられない用事のために4回欠席することもあります。

それにも拘わらず、理由の如何を問わず、4回欠席という欠席回数のみによって会員資格を奪うというのは、社交クラブのようなファジーな団体の組織管理としては窮屈に過ぎるからであります。したがって、法律家であれば、このような場合には但書きを付けるのであります。『但し、正当な理由のある時は、この限りに非ず』と。

では、シカゴクラブには法律家が居なかったのか、と謂いますと、ポール・ハリスが居ました。

では、法律家が居たのに何故このような窮屈な規定をつくったのか。

それは、お互いに仲良く助け合って行こうと誓い合っておきながら、4回も連続して欠席するということは、当時は2週間に1回の例会でありましたから、2ヶ月もお互いの安否も気遣わないことになります。したがって、「そのような冷たいやつは俺たちの仲間ではない。辞めてもらおう」と謂うのが彼等の心であったのであります。

28. 『ロータリークラブの発祥』 その10

前回は、創立総会に当たる第3回目の会合において、クラブ組織に関する重要な原則として、会員資格の得喪に関する原則を決めた話をいたしました。

そこで次に、クラブの名称の決定であります。これは、会員の共通の関心事でありました。

ところが、ポール・ハリスが、皆のクラブだから、名称の決定は、全員一致で決定しようとしたため、結論が出なくなってしまうのであります。何故ならば、全員一致の意思というのは神様の数値であって、人間の世界では皆が真面目に議論すればするほど一致出来ないものだからであります。したがって、全員一致の決定というのは、神様の世界の出来事か、或いは、人間の世界であれば、よほど不真面目な人間の集まりでなければ望むべくもないことでもあります。

山本七平氏のペンネームであるイザヤベンダサンの【日本人とユダヤ人】の中に、ユダヤの社会では『全員一致の審決は無効である』というルールがあるのは興味深いことでもあります。恐らく、彼等も人間の審議である以上は、全員一致というものは不真面目な決議であると考えたのでありましょう。

では、どのような名称が提案され、どのようにして決定されたのか。

一例を挙げますと、Conspirator's Club。これはポール・ハリスの提案でありましたが、共犯者という意味もあってはずされました。The Roundtable Club。Booster Club。Chicago Circle。The Chicago Fellowship。The Lake Club 等々であります。

要するに、クラブ名を決めるために議論は沸騰したのであります。衆議一決しないため、皆が疲れてしまって、挙げ句の果てに、自嘲がやって来て、もう名前などはどうでもよいから議論を止めようと言いだした時に、誰かが提案して、『役員も、例会場も持ち回るのだから、持ち回りと言う意味で、輪番という言葉、つまり、ロータリーという言葉が付けたらよいのではないか』と言った時には、もう誰も反論するだけの気力が残っていませんでしたので、どうでもよいからそれにしようと言ったことでロータリークラブに決まってしまったのであります。

ポール・ハリスの晩年の追想録(1947・"My road to Rotary")には、『誰がロータリーと名付けたかは、判らない』と書かれています。一方、同じポール・ハリスの1934年の"This Rotarian Age"の中では、『ロータリーという言葉を最初に使ったのは、初代会長のSylvester Shieleであった』と書かれています。

このように、ポール・ハリスの証言が、同じ事柄について二つに割れていますので、私としては、何れを真実とも決めかねるのであります。しかし、「誰が名付けたかは判らないようであるが、一説によるとSylvester Shieleだとも言われている」という具合に結論づける他はないと思うのであります。

29. 『ロータリークラブの発祥』 その11

前回は、創立総会でクラブの名称を決めたという話をしました。

そこで今回は、ロータリークラブはどのような特色を持ったクラブなのか。他の職業人の団体とは、何処の点が基本的に違うのか？そして、職業人の親睦団体ではあるが、一体何を本質とする団体なのか？について煮詰めておかなければなりません。

このことは、当時においてはポール・ハリス一人の発想ではありますが、先ず2週間に1度皆が集まってお互いに親類付き合いをする団体であると言えます。

では、親類付き合いの具体的な内容は一体何か？

このクラブには、同業者は一人も居ないのであるから、皆で助け合うということも、その点から考えて行かねばなりません。

そこで、第1に、例会と例会との間で、物を買うときには会員から買うこと。そして、注文を受けた会員は、親類から注文を受けたのだから、利益を計上せずに原価の取引をすること。そして、例会と例会との間で、誰と誰とがどのような取引をしたかという取引の記録をとる役職を設けました。これを統計係の幹事 statistician と呼びました。

勿論、この原価の取引には、色々と問題があります。例えば、弁護士の報酬や坊さんのお布施等、殊に、専門職業 profession の側に問題があります。

元来、専門職業 profession は、愛情の支配する世界であって、打算の世界ではありませんから、原価という概念がありません。

更に、突き詰めれば、元来これら専門職業 profession は、報酬を請求すべき立場あ

りません。したがって、原価という概念を入れる余地がないのであります。

また、実業 business の方にも問題がないわけではありません。例えば、タバコ小売業者は小売価額を崩すことは出来ません。

また、損害保険の保険料についても問題があります。

このような諸々の問題に対してポール・ハリスは、『あまり細かいところをつついても、結論は出ないだろうから、一つその精神で行こう』という形でこの問題を乗り切ったのであります。

これは、教条主義にならないという意味で、ロータリーの原則を理解するには大変よいことであります。ロータリーは、元来、fuzzy な団体でありますから、このような解決の仕方が望ましいのであります。

第2に、お互いの職業を宣伝しあうこと。

即ち、例会と例会との間で、地域社会の人から職業上の相談を受けた場合、例えば、誰かよい弁護士を紹介してくれないか、と頼まれたら、ポール・ハリスを紹介するというように皆で会員の職業を宣伝しあったのであります。

以上の二つのことを次の例会で報告させたのであります。

30. 『ロータリークラブの発祥』 その12

前回は、ロータリークラブはどのような特色を持ったクラブなのか、について第1に原価の取引をすること、第2にお互いの職業を宣伝しあうことという二つのことを決め、次の例会でその経過を報告させたという話をしました。

そこで、やがて心が通い合うようになり、第3に、精神的に助け合うようになりました。即ち、会員が、自分の企業経営上の悩みとか家庭の悩みとかを持ち寄って、皆で衆知を集めて解決して行くようになりました。将に三人よれば文珠の知恵であります。

このように、ロータリーの本質は、発想の交換 Exchange of Idea であるという基本的な考え方があります。古いロータリーの綱領の中には、この発想の交換 Exchange of Idea という考え方が盛られていましたが、いつしかこの文言がなくなりました。

それはあまりに当然なことであるので書いておく必要がないと考えたからであります。

発想の交換と謂うものは、ごく自然に行われることであり、それが奉仕のエネルギーになるという自覚が1922年までにはロータリアンの心の核心に出来上がっていたわけであります。

Exchange of Idea 即ち精神的相互扶助。これがやがて20年余りの後にロータリーの意味での奉仕概念に転化して行ったのであります。

1927年に誕生した職業奉仕の概念は、突如として無から有を生じたものではなく、言葉が生まれる前に柔軟な思考があったし、それに基づく実践もあったわけであります。

また、職業奉仕に限らず、社会奉仕につ

いても Exchange of Idea が奉仕のエネルギー源になっていたのであります。したがって、これをロータリーの意味における奉仕思想の萌芽と見てもよいのではないかと思うのであります。

このようにして第4に、会員増強についてのルールを取り決めました。

ロータリアンは、会員を勧誘するとき、何を Sales point にするかという問題であります。大学卒も殆ど居ない、金持ちも居ない、何時倒産するか判らない中小企業経営者達が社交クラブを作ったからといって、魅力がなければ誰も入会しないだろう。したがって、何を Sales point にするかが問題でありました。そこで、『我々は、嘘をつかない誠実な人間である。この誠実な人間だけが、このクラブ ライフの功德を受けることが出来る』このような説得の方法があることを確認したのであります。

そこで、

第1. 同業者は入会できない。

第2. 誠実な人間しか入会できない。

この二つの原則によって、ロータリーは始まり、会員の増強を図り、会員相互も助け合いながら、お互いに楽しく1年余の歳月が経過しました。そして、やがて1906年4月、有名な Donald Carter の物語が起こったのであります。

31. 『ロータリークラブの発祥』 その13

前回に続いて、Donald Carter の話を致します。シカゴクラブの二代目会長 Albert White の時、Frederic Tweed という会員が Donald Carter に対してクラブへの入会を勧誘しました。すると Donald Carter は、クラブの互惠主義の説明を聞いて、『君達は、お互いに助け合って、豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制の原則であれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持たない一般地域社会の人達は一体どうなるのか。

私達は、この地域社会に生まれ、地域社会に育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に何らの恩返しもしない。何らの足跡もの残さないで、自分達だけが助け合って隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は永続性がないだろう。自分は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことは出来ないよ』と言ってキッパリと入会を断ったのであります。これを聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。『Donald Carter の言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう』と言って、職業人の親睦のエネルギーを世のため人のための奉仕に使おう、と考えるに至ったのであります。

実は、この Donald Carter の刺激から出てくるポール・ハリスの反省が、ロータリーにおける奉仕概念の誕生の物語でありました。と同時に、それはロータリー拡大の系譜の始まり（萌芽）でもあったのであります。それは何故かと言いますと、仲良しクラブの親睦だけからは、ロータリー拡大の

理念は出て来ないからであります。奉仕という世のため人のためのクラブであるならば、それはシカゴにだけあるべき筋合いのものではなく、全米の更には全世界の地域社会に存在して然るべきものであると謂うので、ロータリーの拡大が始まったのであります。

このようにして、ロータリークラブは、単なる親睦と相互扶助を目的とする社交クラブから、親睦と奉仕を目的とする社交クラブに進化したのであります。

そして現在、全世界にクラブ数 34,000 余り、会員数 1,218,000 名余りを擁する巨大な組織になったのであります。

ただ、このような巨大な組織になったことが、果たして良かったのかどうか、反省材料は山積しています。先ず、ポール・ハリスが開発したロータリーの思想と組織は、1947年にポール・ハリスがこの世を去ってから次第にロータリーの衰退が始まり、現在、ロータリーの核になるものを殆ど失ってしまいました。

その最大の原因は何か。国際ロータリーは、ロータリーの拡大を急ぐ余り、ロータリーの心を育てることを忘れたからであります。その結果、ロータリーを理解出来ないロータリアンが規定審議会による多数決原理によってロータリーの核にあるものを葬り去ったのであります。これを20世紀初頭の輝かしいロータリーに復元することは、将に永遠の課題と謂うほかはないのであります。

「ロータリーあれこれ 大いなる春といふもの来るべし 高野素十」 伊丹ロータリークラブ卓話

2012.3.29

深川純一

これは、私の俳句の恩師高野素十の作品ですが、今日は、彼岸も過ぎていよいよ春本番、万物の生命の躍動する季節であります。世の中も何かと忙しくなる時節ではありますが、忙中に閑あり、暫くロータリーの話にお耳を拝借致したく存じます。

実は、先週の木曜日から3泊4日の日程で小豆島で開催されたRYLAに参加して参りました。今年、伊丹クラブから3人のカウンセラーが参加されました。

男性カウンセラーとして白井良夫会員、女性カウンセラーとして吉岡博忠会員の奥様と田中賢一会員の奥様の3人がご奉仕して下さいました。

元来、カウンセラーは1地区から男女各々2人ずつ合計4人しか選ばれないのでありますから、そのうち3人までが伊丹クラブから選ばれたというのは異例のことです。これも、加藤拓会員はじめこのRYLAを育てようという心ある人達のご支援のお陰であります。

このRYLAのカウンセラーというのは、狭いキャビンで4日間、受講生達と寝食を共にしながら受講生達の相談相手になって頂くという真に大変なお役目でありまして、RYLAが終わった後も受講生の同窓会に出たり、相談相手になったり、時には結婚の仲人も務めるなど後々までお付き合いをしていただくこともあり、本当に御苦労さんなお役目なのであります。

当クラブからは第1回RYLAの時の故

橋本勲会員を始め今までに加藤拓会員や福武会員の奥様などもカウンセラーとしてご奉仕して下さいました。

今、34年前の第1回RYLAのカウンセラー橋本勲さんのことを申し上げましたが、その時のRYLAは3月29日から4月1日にかけて行われましたので、橋本さんは、年度末にはどうしても会社に戻らなければならないので途中で帰ると言っておられたのでありますが、受講生達と寝食を共にしている内に彼らの熱意に感動して「もう帰れなくなった」と言って、結局最後まで3泊4日を御奉仕して下さいました。

RYLAが終わってお別れの時、受講生達が橋本さんを胴上げをして、涙々で別れていった情景は真に感動的でありました。この時の受講生の一人、松山の吉岡祥三君とは、私は未だに親しくお付き合いをしています。

彼はボーイスカウトのリーダーでありましたが、RYLAから松山へ帰って松山ローターアクトクラブを起ち上げた熱血漢であります。

この第1回RYLAは私達にとって初めての体験であっただけに特に印象鮮明に色々なことを覚えています。その中でも特に印象的なことを二三紹介しておきたいと思います。

先ず、その当時のガバナーであった西宮クラブの故執行孝胤先生の素晴らしいリー

ダーシップは、昨日のこのように鮮烈な印象として私の記憶に焼きついています。

殊に感動的であったのは、3日目の昼食後から夕食まで午後一杯かけて行われた各キャビン毎のバズセッションの後、その結果を夕食後に発表するフォーラムが食堂で開かれました。当時レクチャールームなどは未だありませんでした。

この時最初に「Around the corner」という映画が上映されました。この映画は世界の国々をテーマとした素晴らしいものでありましたが、その映画が終わったその直後、突然、執行ガバナーが、『皆さん、灯を消して真っ暗にしましょう』と言って真っ暗なホールの中央に立たれました。そして、マッチを擦って一本のマッチを灯されました。執行先生の顔だけが明るく照らし出されました。そして話し始められたのであります。『皆さん、今、このマッチの火は私の顔しか照らしていません。さあ、皆でマッチを灯して下さい。もっと明るくなるでしょう』

皆が一斉にマッチを擦りました。皆のマッチの火で皆の顔が明るく照らし出され、ホール全体が明るくなりました。そして静かに話かけられました。

『一本のマッチの火はそれぞれ小さいけれども、それが沢山集まれば皆が明るくなります。これが私達の仕事なんです。私達が灯すのは、大きな松明でも何でもありません。』

本当に小さな小さなマッチの様な火であるかも知れませんが、そのことによって私達は、この世の中を明るくして行こうとしているのです』と。

誠に感動的な場面でありました。

後でこのことについて先生によくあんな素晴らしいことを思いつきましたね、と聞

きましたところ、『映画のあとの暗がりにはダニー・ケイの演出を思い出し、咄嗟にそれにならないうまでだよ』と謙遜しておられましたが、それにしても映画のあとの感動がまださめやらぬ内に、その感動を更に印象づけるために、咄嗟の機転でこのような行動に出て、ロータリーの原理を説かれた先生を素晴らしいと思ひ、マッチの火に照らし知らし出された先生の姿に真のロータリアン像を見る思いがしたのであります。

私はこの感動的な場面に居合わせて、その年度のオーストラリアから出たR I会長クレム・レヌーフのことを思い出していました。クレム・レヌーフは、その年、世界で初めて3 Hプログラムを立ち上げました。3 Hというのは、Health 健康、Hunger 飢餓救済、Humanity 人間尊重の頭文字をとったもので、人道主義の提唱であります。そのこと自体は良かったのでありますが何故そのプログラムを提唱したか、の理由付けが振るっていました。即ち、「全世界のロータリアンが、個人奉仕で鉄砲をポンポン撃つような奉仕では大したことは出来ない。したがって、例えば、百人のロータリアンが持っている百丁の鉄砲を国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、より大きな奉仕が出来るだろう。だから全世界のロータリアンの皆さん、この3 Hプログラムに協力して寄付して下さい」と謂うのであります。

これは、一見、真に説得力があるかに見えます。しかし、ロータリーの根本原理に反すること著しいものなのであります。それは一体何故か。

先ず、個人奉仕を鉄砲に譬えること自体が間違っていますが、仮に個人奉仕が鉄砲

だと仮定しても、そもそもロータリーは、未だ曾て百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を持ったことがないのであります。これは将にライオンズクラブの団体奉仕の発想なのであります。

ロータリーの発想は、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、百丁の鉄砲のそれぞれ一丁ずつの鉄砲を一門の大砲に育て上げると謂うのであります。すると、百門の大砲が出来上がります。これが個人奉仕を標榜するロータリーの中核にある考え方なのであります。したがって、執行先生の示されたマッチの火の譬えで謂えば、百本のマッチの火を一本の松明にするのではなく、百本のマッチの火をそれぞれ百本の松明に育て上げるのです。

これは、一見、団体奉仕の提唱のように見えますが、然に非ず、その根底には、若者達のそれぞれ一本ずつのマッチの火をR Y L Aやロータリーを通して、やがて地域を動かし、世界を動かしていく大きな奉仕の火に育てて行こうという個人奉仕の心があるのであります。

ただ、大事なことは、ライオンズの発想を責めてはなりません。ロータリーを良しとし、ライオンズを排斥するのは「こだわり」であり、ポール・ハリスの説く「寛容」の精神に反します。この世の中にとってはロータリーもライオンズもどちらも大切なのであります。物事を全て大きく包摂していく心を忘れてはならないと思うのであります。

さて、話をマッチの火に戻します。今、執行先生のマッチの火の話を読しましたが、このR Y L Aで火というものについて印象鮮明に私の心に焼きついたものにキャンプファイヤーがあります。

一般にキャンプファイヤーと謂えば、楽

しく歌を歌うボンファイヤーのことでありますが、このR Y L Aのキャンプファイヤーは、儀式の火を焚くキャンプファイヤーでありまして、この島の小高い山頂に松林に囲まれてカウンスリングと呼ばれる儀式の火を焚く場所があります。

第1回R Y L Aの夜は、折悪く風速30メートルの暴風が吹き荒れていました。翌日、この日は全国で死者行方不明15名、負傷者169名と報道されたほどの荒れようでありました。

山頂は風当たりが強かったので、キャンプファイヤーは、風裏になる浜辺でたくことも出来たのであります。今井先生はキャンプディレクターとして敢えてこのカウンスリングで焚くことを決断されたのであります。というのは、儀式のファイヤーを焚くというカウンスリングをもっている青少年団体は少ないので、一つのシンボルとしてこれを受講生達に見て貰いたい、キャンプファイヤーの演出としては、暴風の中だから失敗するかも知れない。然し、その中に或る種の意図というものを学んで頂ければ結構だと考えられたからであります。

暴風の中でキャンプファイヤーは決行されました。執行ガバナーが営火長となってマジックファイヤーが点火されましたが、忽ち強風に吹き消され、やがて、トーチによって火が運ばれました。

流石にボースカウトのOBであるロータリアンによって設営されたファイヤーは、人々が吹き飛ばされそうな強風の中で無事に燃え続けました。

受講生達の各班からの寸劇も終わり、キャンプファイヤーは終焉に近づきつつありました。皆がフレンドシップサークルを組み、ドヴォルザークの「新世界」をハミ

ングする中で、今井先生が受講生達と肩を組み、ほのかな火の明かりに照らされながら、静かに若者達に諭された言葉は非常に印象的でありました。即ち、「キャンプファイヤーの間、私達をあかあかと照らし、暖かさを与えてくれた火も、漸く消えかかっています。私達はこの薪を通して三つのことを学びました。

第1は、「薪」は1本では燃えません。

最初に薪が組み立てられたように、それぞれが協力しなければ火はあかあかと燃えないのです。

第2に、その「薪」は、今見るようにすっかり崩れてしまっています。私達に光を与え、熱を与えてくれるために、1本、1本の「薪」は灰になってしまっています。世の中に光を与える奉仕は、それなりの時間と労力とその他のよいものを犠牲にし、捧げなければならないのです。

第3に、この決意と協同があっても、運んできたトーチによって火が付けられるように、一つの目的が明確でなければなりません。ここに来てロータリーの火がつけられ、諸君の奉仕の心と協同の作業があるとき、今日のキャンプファイヤーのように周囲をあかあかと照らすことが出来るのです」と。

受講生達の心に染みとおる素晴らしい話でありました。

さて、ここで話の視点を少し変えます。

R Y L A についてのコメントとでも謂うべき話をしておきます。

「昨夜三更月到窓」昨夜三更月窓に到る、という言葉があります。どういう意味かと申しますと、昨夜12時頃、月が自分の部屋の窓に来てくれていた、と謂うのであります。

これは、昔、中国の南泉禪師が弟子の趙州禪師に語った言葉であります。

真夜中にふと目が覚めると、月が自分の部屋を照らしてくれていました。便所に行こうとすれば、廊下も照らしてくれます。

実に有り難い月の好意であります。

もし、真夜中に目が覚めなかったら、この月の優しい好意に気がつかなかったでしょう。もし、気がついても月に感謝する人はいないだろうと思います。

月の優しい好意に気がつく人がいなくても、感謝する人がいなくても、月は秘かに優しい光を全ての人に与えてくれています。

しかし、月は人から何らの報酬を求めようとはしません。これは、月だけではありません。太陽も、草木も、水も、森羅万象全て私達の命の恩人でありながら、一切報酬を求めないのであります。

ロータリーの奉仕もこのようにあります。日本ロータリーの創立者米山梅吉先生は、「ロータリーは隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある」と言って、苦学生に学費を毎月援助しながらも、そのことを一切口にせず、一切の反対給付を求めなかったのであります。将に先生は "Service, Not self" 自己犠牲の世界に生きた人、陰徳陽報論者でありました。

このように致しまして、この世の中のありとあらゆるものが、そのあるがままの姿で私達の生命の恩人であります。そのままの姿で仏の性を現し、神の愛を示しているのであります。これを仏教では「山川草木悉有仏性」山川草木悉く仏性有り、と謂うのであります。

実は、この言葉はロータリーの根底に流れる思想を表しています。即ち、ロータリーの奉仕の一つの在り方は、何ものをも求めず、ひたすら未来のために種を

蒔くことであります。

そこで、九州日蓮の総本山本經寺の住職であり、千種会で私と共に小堀先生の教えを受けた大村北クラブの佐古亮尊さんの説かれた話を紹介しておきます。『ジョナサン・チャップマンという人について知られていることは、彼が林檎の木をこよなく愛したこと、そして、1人で林檎の種を死ぬまで蒔き続けたことであります。

コーヒーを入れるズックの袋の口から顔を出し、四つの穴を開けてそこから二本の手と足を出すという袋のお化けのような格好で、頭には鍋をかぶり、裸足で50年間、山や野を歩き回りました。

サイダー工場で汁を搾った残り糟の林檎をもらい受け、一つ一つの皮を剥き、その種をほじくり出し、それを自分の着ている服よりも遙かに上等な鹿皮の袋に入れて、オハイオ州の田舎から、自分の足の及ぶ限りの土地にその種を蒔いて行ったのであります。

日当たりのよい土地を選んで、ざくりざくりと穴を掘り、種を蒔くのであります。

オハイオ州の上流のインディアンの住む部落にも、野獣の潜む森影にも、彼の林檎の種は蒔かれました。そして、疲れるとゴロリと横になり、朝は小鳥よりも早く起き、仕事を始めていました。

いつの間にか彼は「林檎おじさん」と呼ばれて、白人にも、インディアンにも親しまれました。彼は、芽が出て育てゆく林檎の木々を見回り、人々にその育て方を教え、更に新しく種を蒔くところを探して忙しく働きました。

夜は、それらの人達の炉端に座って神様の話をし、自分の聖書の何ページかを裂いて人々に渡しました。人里離れた開拓地の人達にとって、この何ページかの聖書は、

どんなにか慰めの力になったことか。

50年の間、誰に頼まれたのでもなく、ひたすら林檎のない土地に林檎の種を蒔き続けました。にも拘わらず、何故、ジョナサン・チャップマンが林檎を植えたのか、誰も知りませんでした。

彼のこの長年の功績に対して、勲章もなければ、銅像もありません。更に墓もありません。だだ、毎年、アメリカの田舎の春に、うす紅の花が霞のように匂い、秋に真紅な林檎の実が珠玉のように実るだけあります』と。

ここで、マルティン・ルターの言葉を引用します。即ち、『たとえ明日が世界の最後の日であっても、私は林檎の木を植える』というのでありますが、これはロータリーの思想と共通の境地にある言葉であります。

ロータリーの役割は、結果を求めず、ただひたすらに種を播くことであります。その結果、例えば、RYLAで撒いた種が若者達の心に何時か芽生えるかも知れない。

それはすぐ芽生えるかも知れない。或いは1ヶ月後に芽生えるかも知れない。1年後かも知れない。10年後かも知れない。或いは永久に芽生えないかも知れない。例えば芽が出なくても、ただひたすらに種を蒔く。

そして、未来に夢を託す、これがロータリーの役割であります。私は、このことを第1回RYLAのレポートに書き留めました。

このように、ロータリーは未来を夢見る思想であります。したがって、ロータリアンは理想主義者であるべきであります。

ロータリーの理想主義は、只ひたすらに種を播く、そしてロータリーをShareするのであります。これがロータリーであります。

「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」 伊丹ロータリークラブ

深川純一

日本のロータリーの先輩達は、1920年にロータリーを日本に導入するに際し、アメリカで生まれたロータリーの奉仕理論を基本的には踏襲しながらも、これを日本の社会に同化させることを試んでいます。

殊に、戦前のロータリアンの特徴としては、ロータリーを思想の世界で受け止めようとしたことが特徴的です。一言で言えば、ロータリーとは何かということを追求め、深層心理においてロータリーを理解したのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーによりますと、『戦前の日本のロータリーは、ロータリーを外来思想の一つとして受け取っていた。外来思想と言えば、既に、仏教、儒教、キリスト教が入ってきてをり、明治維新後は、更に、ヨーロッパのデモクラシーやマルキシズムのような思想が入って来ていた。ロータリーもそれらの一つと考えられていた。

そのため、ロータリーの思想とは一体どのようなものか、外来思想や従来の日本古来の思想である国学や報徳教の思想などと比較して、何処が違うのか、そして何処が同じなのか、ということについて大いに研究が進められた。

結局、二宮尊徳翁の報徳教の教えが最も近いものであるとせられ、これが、昭和3年東京における太平洋地域大会 Regional Conference で、大阪ロータリークラブの土屋大夢の【ロータリー以前の偉大なロー

タリアン】と題して、二宮尊徳翁の思想の紹介となった』と言っておられます。

この太平洋地域大会で講演した土屋大夢（本名元作）は、杉村楚人冠の前任者でありまして、ジャーナリストであり、学者であり、思想家でありました。

彼は、【ロータリー以前の偉大なロータリアン】という論文を英語で書いて発表したのですが、その内容は職業奉仕論でありました。即ち、二宮尊徳翁の『田畑を耕すに先立って心の田畑を耕せ』というように日本人の心にピタッと来るような奉仕哲学の解明をしたのは、戦前のロータリーにおける大きな功績でありました。そして、第3代目ガバナー大阪クラブの村田省蔵さんは、ロータリーの日本化というスローガンを掲げましたが、土屋大夢の英語の論文を日本語に翻訳して、昭和9年のRI第70地区大会でロータリーを日本の土壌に親しむように提唱したことを通じて、報徳教の思想は戦前のロータリアンの中に段々と浸透して行ったのであります。

なお、土屋大夢のこのテーマによる最初の講演は、1921年9月 Nash Ville RC でありました。したがって、これは東京クラブ創立の翌年であります。

土屋大夢は、この講演の冒頭で、二宮尊徳が箱根湯本で説いた「湯舟の教え」を引用しています。その講演の要旨を紹介しますと、土屋大夢は、1921年9月、ロータリークラブの会員としてテネシー州ナッ

シュビルを旅行中、地区のロータリークラブの例会に出席して暫く喋るように頼まれたのであります。そこで、当時イギリスとアメリカのごく限られた読書家の間でしか知られていなかった日本の農民哲学者二宮尊徳の話をしたのであります。それは、二宮尊徳が弟子と一緒に温泉に入っていた時、弟子に問いかけた話であります。即ち、「湯を手前に引くと大部分の湯は一旦は自分の方へ来るが、すぐ向こうへ逃げていく。反対に湯を押すと一旦は向こうへ逃げていくが、すぐ自分の方に帰ってくる。これは不思議な現象と思わないか。しかも、強く押せば押すほど湯は強く戻ってくる。これが自然の法則である。したがって、博愛とか正義とかいうことは、ほかでもない善意を他人に施すこと、即ち、湯を押し出すことであり、不道德とか不正とかいうことは、湯を手前に引くことに喩えられるのだ」と説きました。そして更に次の喩え話を引用してこの教えを説きました。

「人間と動物の前足（手）を見るとその違いが解る。詰まり動物の前足（手）というのは、物を掴んだり引っ張ったりするように出来ているから、湯を手前に引くようには出来ているが、湯を向こうへ押しやるようには出来ていない。人間の手は、湯を手前に引くことも、向こうへ押しやることも出来るようになっている。したがって、（人間らしい）人間というのは、動物と同じであってはならない。他人のことを考えず自己の利益のためだけに努力する者は、顔は人間の顔をしていても、その心は動物と同じである」と説いたのであります。この話は、ナッシュビルのロータリアンを大変感動させたのであります。

そして、土屋大夢は、二宮尊徳の人生

は、他人を助けるための自己犠牲であったと謂っています。したがって、彼の思想は、ロータリーの奉仕の視点から見れば、将に B.F.Collins の自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" であったと謂えます。彼は、常に推譲、分度、勤労、至誠の四つの教えを説いたのであります。

オックスフォード大学のエスリンカーペンター教授によれば、二宮尊徳は如何なる伝統からも拘束されず、彼自身の推譲の教えを説いた。彼が自らの宗教観について聞かれたときは、自分の宗教は、スプーン一杯の神道とスプーン半杯ずつの儒教と仏教を融合したもので、自然を観察してその法則を学び、理解すべきである、と言ったとのことであります。

彼にとっては、自然に存在するものは、それぞれ美点を有し、徳行をもってそれに報い、崇拜することであると教えたのであります。

また彼は、自然循環と反応を観察し、先ず他人に与えることの原則を説いたのであります。先ず他人のために働き、自分が何か欲するものがあれば、それは他人によって与えられるであろうと説いたのであります。

要するに、二宮尊徳は、「自然を観察し、自然の法則を理解せよ」と説いたのであります。以上は農民哲学者二宮尊徳の自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" の人生哲学であります。

ところで、B.F.Collins の自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" に対立する思想として Arthur Frederic Sheldon の超我の奉仕 "Service above self" の思想の系譜に属する人に、日本では大丸の創業者下村彦右衛門がおります。この彦右衛門の後継者の一人に昭和 12 年の第 6 代目ガバナー大阪クラ

ブの里見純吉さんがいます。

そこで、大丸の社是「先義後利」の思想を紹介しておきます。

下村彦右衛門は、満18才で家業を継ぎ、行商をして苦労しながら1717年に京都に呉服店「大文字屋」を開業しました。そして、次々に店舗を拡大して、大阪の心斎橋に出店しましたが、八文字屋甚右衛門との共同経営で出発した店は繁盛したのですが、やがて甚右衛門側の元締・善兵衛が遊興に耽り始めたので共同経営を解消し、入札でどちらかが経営権を握ることになりました。その時、落札できなかつた側は近所に店を出さないという約束をしました。

彦右衛門は、僅かな金で落札できなければ、相手が悔しがらるだろうと思って、かなりの高額で入札し、結局、彦右衛門が落札したのでありますが、それから間もなく、なんと甚右衛門が約束を破って直ぐ近くに出店したのであります。

周囲の者は、訴えようと息巻いたのですが、彦右衛門は動ずることなく静観していました。すると、やがて甚右衛門の店は閑古鳥が鳴き始めたのに対し、彦右衛門の店は大繁盛で、その差は歴然として来ました。そして、遂には彦右衛門は、甚右衛門の店までも買収してしまったのであります。

商売敵の邪魔をして嫌がらせをしても客がついてこなければどうにもならないので、「義」を貫いた彦右衛門の勝利に終わったのであります。自分の利益だけを追求しても客はついてきません。客は、どちらの店が良心的か、本能的に知っていたのであります。

この「先義後利」というのは、儒学の祖の一人荀子の榮辱篇の「先義而後利者榮」

(義を先にして利を後にする者は榮える)という言葉をもとに定められたものであります。大丸では、今でも「先義後利」の社訓をことあるごと社員に伝えていると謂います。

また、昔、大丸の店員は、顧客の顔や好みのみならず家族構成まで覚え込み、新しい商品が入ると「あのお客さんにどうだろうか」と考えたと言います。

また、朝から晩まで得意先で商談をして、風呂まで沸かして帰ってきた店員もいたと言います。このように何時も客に「義」を尽くすことは、一見、商売とは結びつかないように思われますが、風呂まで沸かしてくれる店に親しみを覚えない客はいない筈であります。これは、職業奉仕の核にある顧客第一主義の極致であろうかと思うのであります。

..... あ と が き

今回の冊子も『再びニコニコ箱について』から『ロータリーあれこれ』まで入会後間もない会員にもバイブルのごとく解りやすく、且つ内容の濃い冊子に纏められています。深川先生の「ロータリー」を教示いただくことで、我々はその原点を知り、ロータリアンとしての行動指針として活用しなければなりません。それから、伊丹ロータリークラブ会員ほどこれほど恵まれた環境はないでしょう。というのは、例会で深川先生の情報を知り逃してもこの冊子で復習できるのですから……

最後になりましたが、深川先生には我々会員の為に湯水のごとく惜しみなく「ロータリー」をお教えいただき、感謝し切れません。また、発刊に際し竹中前年度会長、福武前年度幹事、事務局吉永さんのご尽力にお礼申し上げます。

2012年7月 雑誌・ロータリー情報委員会

